

香川敬三と明治の水戸藩士—武田金次郎らの知られざる末期—

石井 裕

一 香川敬三について

香川敬三（かがわいぞう一八四一—一九一五、旧名蓮田了介・鯉沼伊織・香川広安、変名蓮見東太郎・小林彦次郎、字は心豊、東州・白水などと号す）は、天保一二年（一八四一）一月一日、常陸国茨城郡下伊勢畠村（現在の茨城県常陸大宮市下伊勢畑）の郷土蓮田孝定の三男として生まれた（香川家戸籍、香川家文書二三七九八）。同村吉田神社の神官鯉沼意信の養子となり、鯉沼伊織と称した香川は、兄東三とともに水戸へ出て藤田東湖、加倉井砂山の日新塾などに学び、万延元年（一八六〇）には三六名の同志とともに江戸薩摩藩邸に投じたが、捕らえられて水戸藩駒込邸に禁獄された。文久三年（一八六三）春に水戸藩主徳川慶篤、同年秋にも徳川昭武に扈從して上京した香川は、在京の尊攘派の志士や公卿らと関係を深め、一時一橋慶喜の床机廻りとなっている。しかしその急進性が



写真1 香川敬三肖像
（明治23年 香川家文書15848 皇學館大
学研究開発推進センター史料編纂所）

忌避されて罷免、水戸藩からも嫌疑を受け、但馬・丹波・備前・周防・讃岐などに潜伏し、その間、松尾但馬（相永）の手引きで岩倉具視の知遇を得ている。この岩倉との運命的な邂逅が、香川の後の人

契機となった。

慶応三年（一八六七）一二月、香川は鷲尾隆聚を奉じて土佐の田中光顕や近江の三宮義胤、十津川郷士らと共に高野山で挙兵し、旧幕府の五条代官などを接收して、明治元年（一八六八）正月に凱旋帰京した。その後、岩倉具視の依頼で東山道鎮撫総督岩倉具定、副総督岩倉具経の兄弟（両者とも具視の子）の補佐役として随従し、四月一日には軍監に任ぜられている。殊に香川の戦功として語られるのが下総国流山で元新選組局長近藤勇を捕らえたことだが（『水戸歴世譚』附二三〜四頁）、これに関しては諸説あり真偽は定かではない。

香川は、明治四年一月の岩倉使節団に参加、帰国後の同六年三月に宮内省に奉職すると、一四年五月に皇后宮大夫兼宮内大書記官となり、これ以降、明治天皇の皇后である昭憲皇太后（美子皇后）の側近として、その崩御まで長く仕えることになった。香川は宮内少輔として枢密顧問官など政府高官を歴任し、伯爵や勲一等旭日桐花大綬章を授与されるなど、まさに位人臣を極めていた。また明治・大正期の宮内省の高級官僚として、土佐出身の二人の宮相、土方久元と田中光顕とともに「一種の元老」（『万朝報』明治四四年五月二四日付）とも呼ばれる隠然たる力を中央政官界で振るったと評されている。

戦前、東京日日新聞などで活躍したジャーナリスト伊藤金次郎は、香川を評して「土民から、伯爵へ、かれもまた風雲児であった。（中略）華族を見ると、水戸の徳川圀順の侯爵をはじめ（中略）ことごとく藩主ならざるはないのに、那珂河畔の百姓から、殿様の仲間入りするは、こ



写真2 香川敬三墓所(青山霊園、東京都港区)

れを風雲児と申さずして、何んとせう。」(伊藤金次郎『わしが国さ』刀江書院、一九二六、四六八頁。傍点筆者、以下同。)と述べている。旧水戸藩辺陲の地の一介の郷士から勲一等従一位伯爵という「殿様」の地位まで登りつめた香川は、まさに時代の「風雲児」と呼べる存在であった。

香川と同じく、宮内省で侍従長や主猟局長などを務めた旧水戸藩執政山口正定(一八四三—一九〇二、字は士格、通称徳之進、野鶴と号す。桜田門外の変の参加者山口辰之介の甥。正三位勲一等男爵)の日記に、きわめて印象的な場面が記録されている。

小梅邸ニ行ク、慶喜公、長岡護美(貴族院議員、熊本藩主細川齊護六男)、香川敬三、藤田健(藤田東湖二男、茨城県参事官)及ヒ余ナリ、昼饌ノ西洋料理御饗応ニ預ル、余ハ明治維新ハ屢慶喜公ニ謁シテ攘夷ノ激論等申上ケタルコトアリキ、則チ一橋公ト称シ奉ル時ノコトナリキ、其後將軍職ニ就カセラレテハ謁見モ出来スシテ原来親シク面謁シタルコトナシ、然ルニ本日ハ計ラスモ一堂ニ於テ共ニ昼饌ヲ賜ルハ余ニ於テ欣然ノ至ナリ

(「山口正定日記」明治三十一年六月一六日条、宮内公文書館蔵)

明治三十一年三月二日、最後の將軍徳川慶喜が約三〇年ぶりに明治天皇に謁見し、名誉回復を果たすという歴史的場面が演出されたが、その舞台裏で動いていたのが香川であった。その約三ヶ月後、旧水戸藩士でただ二人爵位を授与されたという香川と山口が、幕末に攘夷の激論をたたかわせた旧主慶喜と席を同じくして昼餐の西洋料理に舌鼓を打っている。三〇年という時の流れを越え、一介の郷士から栄進した香川(當時子爵)と、維新後長く静岡で隠棲していた元將軍慶喜(翌年公爵)とが、ともに華族という立場で邂逅する場面だが、変革期に特徴的な激しい身分昇降を内包した明治という時代と、香川がその時代の寵児の一人であったことを示す、きわめて象徴的な場面である。

二 香川家文書について

現在、香川敬三関係史料を含む香川家文書は、皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所が借用、整理している(香川家の蔵書(主に敬三次男桜男のもの)は茨城県立図書館(寄贈)。戦災を免れ、同家により守り継がれてきた香川家文書は、香川敬三関係史料(主に書翰)を中心に約二万五〇〇〇点に及び、皇學館大学の上野秀治教授を中心に整理が進められ、現在仮目録が作成されている。同目録をみると、皇后宮大夫を長く務めた香川の履歴を反映して宮内省に関する史料が中心となっているが、それ以外にも水戸徳川家、旧水戸藩士など旧藩関係者、実家の蓮田家・鯉沼家などの茨城県関係史料が多数含まれている。

上野氏の論考「香川敬三と茨城」『水戸史学』第七八・七九号、二〇一三)が発表されて以降、特に水戸藩関係の国事殉難者への贈位に果たした香川の役割が注目されているが、その他にも旧水戸藩士の生活扶助や就職斡旋、茨城県下での災害時の義捐金拠出、水戸徳川家評議員としての同家の運営、旧水戸藩及び旧水戸藩士の顕彰活動、水戸藩史料や大日本史の朝廷奉獻など、明治・大正期を通じた香川と茨城県との関わりは多岐

に及んでいる。生前に書かれた評伝でも「其の郷党の君を尊敬すること、今日神の如くに至れる所以のもの決して故なきにあらざる也」(前掲『水戸歴世譚』附二五頁)と評されており、明治以降の香川と茨城との関係の深さを窺わせる。

筆者は、平成二七年度から四度にわたり皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所を訪れ、およそ一五〇〇点の香川家文書中の茨城県関係史料を調査した。主として旧水戸藩士関係の史料を調査したが、香川家文書には明治・大正という新しい時代を生きた、実に様々な旧藩士達の姿が記録されており、明治以降の旧藩関係者の動向や彼らの中央政府との関わりなどを探る上で、大変貴重な史料群となっている。

詳しくは別稿を期したいが、ここでは幕末水戸藩の重役として明治時代を迎えた、幾人かの旧藩士達の姿を紹介しよう。

三 鈴木重義と三木直

まずは執政鈴木重義(一八三八—一九〇六、諱は重睦、のち重義、内蔵次郎、靱負、縫殿などと称す)。鈴木重義は、安政六年(一八五九)、前年に水戸藩に下されたいわゆる戊午の密勅を大場景淑とともに水戸城の祖廟に納め、元治元年(一八六四)の禁門の変では藩主慶篤、その弟昭訓及び昭武を補佐して宮城守護に従事した。明治元年(一八六八)正月、藩政回復(「除奸反正」)を命ずる勅書を奉じて、体調を崩した大場に代わり本圀寺党三百余名を率いて東下し、その後の諸生党との戦いを指揮している。この時、相對した諸生党の重鎮鈴木石見守重棟は、重義の本家筋にあたる。その後、明治二年正月の版籍奉還時に政務局総裁となり、昭武帰国後の同八月の藩政改革で山口正定、武田金次郎、三木直とともに権大参事、翌年一月の改革では山口正定とともに大参事となった。しかし明治四年の廢藩置県により免官、その後は瑞龍山の水戸徳川家墓所守衛の任にあったという(横山康編『大正四年旧水戸藩贈位者諸

賢略歴』(私家版、一九一六)、河野正義編『贈位功臣言行録』(国民書院、一九一六)など)。

混乱する幕末水戸藩を主導した鈴木重義だが、香川家文書に登場する明治期の姿は、生活に困窮し、度々借金を周辺に申し出て旧藩関係者の評判を悪くするという、幕末期とは全く対照的なものであった。以下、関係する史料を見てみよう。

【史料1】六月二三日付香川敬三宛鈴木重義書翰

〔病氣不快の三男引取りに出京したが〕何分ニも困却罷在候間、何共申上候も赤面之至り御恥かしく御事ニ御座候得共、尊君へ伏而御欠入申上候、何卒御事多御不快之御中恐縮之至りニ御座候得共、金拾円何卒御恩借申上度、愚生平ニ奉歎願候、右之次第御汲取拜借相叶候趣御承諾奉希候
(香川家文書一六五六—一)

【史料2】六月二三日付香川敬三宛山口正定書翰

鈴木重義ハ縫殿之事ニ御座候、既ニ小子へも金子入用之事昨日より兩度申来候得共、是迄再三惠贈仕候末ニ付、今般者断申候、長谷川〔清、水戸徳川家家令〕之話ニ何二分此節者鈴木評判不宜趣ニ付、金子ハ借シ出ハ御見合可然相考申候
(香川家文書一六五六—一)

【史料3】明治三六年二月二七日付香川敬三宛酒泉直書翰

突然ニ御座候得共、友人鈴木重義(縫殿事)此程俄ニ吐血致遂ニ危篤ニ相成、其実死亡候処、同人義ハ維新之際著シキ勲功ハ無之候得共、京師ニ在テ禁闕ヲ守衛シ又先年水戸藩へ勅書ヲ賜候以来百節不撓国家ニ勤勞セシコトハ一般之欽仰セシ処ニ有之候間、何と歎特別ノ恩典ヲ蒙リ度秘ニ考候得共、出願致候而も其詮無之歟、寧ろ指控候方可然共奉存候得共、一応御内慮伺申度(鈴木重義は同年一

月三十一日没)

(香川家文書二六九四)

【史料1・2】は、鈴木が香川や山口といった旧水戸藩出身のいわば成
功者に借金を申し出た史料である。【史料1】の宛名は「従三位様」と
あり、香川が従三位となったのは明治一九年一〇月二〇日であること、
また長谷川清が同二四年一二月七日に死去していることから、同書翰は
明治二〇〜二四年のものと思われる。山口は、これまで何度も鈴木に金
を貸し、しかも最近評判がよろしくないの今回断ると、香川に伝え
ている。【史料3】は、鈴木が死去時に友人の酒泉直(本圀寺党、権少
参事など)が香川へ贈位の可能性を打診した史料だが、酒泉は鈴木を「維
新之際著シキ勲功ハ無之」と評しており、贈位を出願しても仕方ないな
ら差し控える、と半ば諦めながら香川へ「内慮」を伺っている。

しかし、後の大正天皇即位大典(大正三年)に伴う恩典で鈴木に従四
位が贈位され、酒泉の願いが実現することになった『大正大礼贈位内
申書』巻一四、一九一五、国立公文書館所蔵。

次は三木直(一八三〇—一九〇六、幼名は之経、左大夫と称す)。三木は、
第二代水戸藩主徳川光圀を養育した三木之次の支族の末裔である。弘化
元年(一八四五)に父之則を亡くし、僅か九歳にして家督を相続した直は、
幼少時に藤田東湖の庇護を受けたという。元治甲子の乱では武田勢に従
い敦賀まで西上、神保宿で梶又左衛門とともに武田耕雲斎らと別れ、上
京したのち備前岡山藩に潜居した。明治元年に本圀寺党とともに東下し、
鈴木重義の第一陣、岡部七十郎の第二陣につづく第三陣の長として水戸
へ下り、その後の諸生党との戦いを指揮する。その間、参政、執政へと
進んだ直は、同二年正月に山口正定とともに軍事局総裁となり、同八月
に軍事寮都督、のち権大参事となるが、同四年の廃藩置県で免官となり、
翌年七月の県令心得渡辺清(旧大村藩士)の入県時に起きた水戸城焼打
事件では首謀者の一人として捕縛された。同事件以降は野に下り、八坂

神社や入四間神社等に神官として奉職、「優遊家に老ゆ」という余生を
送ったとされる(服部鉄石『茨城人物評伝』私家版、一九〇二、茨城
県編『大正七年茨城県贈位者事蹟』茨城県、一九二〇)など。

しかし、三木も最晩年は相当に経済的に困窮していたようだ。常磐神
社宮司のポストをめぐる三木が猟官活動を行っていたことを示す、次
の香川宛書翰を見てみよう。

【史料4】明治三十八年六月一四付香川敬三宛三木直書翰

実ハ愚老モ近來何事モナサズ、徒ラニ消光、随テ別ニ収入ノ途モ無
之困難ノ場合モ候ヘバ、相応ノ職務モト存居候処 常磐神社朝倉
〔政通、本圀寺党〕宮司神社ニ対スル種々不敬ノ行為有之、神社ノ
御威光ニモ関係スル場合ヨリ信徒ノ激昂スル所トナリ別紙ノ罪状内
務大臣并ニ神社局長へ具申致シ更迭ノ建議ニ及ビ居リ候、然ルニ愚
老ノ家ハ別紙ノ如ク義公トハ殊別ノ関係有之家筋ナレバ該社ニ奉職
スルコトヲ得ルハ誠ニ本意ノ事ニ存スレドモ御胞衣塚保存問題以來
小梅邸ノ御機嫌ヲ損シ之ニ加フルニ県庁ニ於テハ高橋〔諸隨、愛諸
の養子〕参事官小梅邸ノ鼻息ヲ伺ヒ傍中途ノ障害モ有之候事ト存シ
候、就テハ閣下ノ御尽力ヲ得バ神社ニ奉仕スルコトヲ得ベク然ルト
キハ一ハ愚老ガ老后ノ国恩ニ報ユルコトヲ得、一ハ義公以來水戸家
ニ尽シタル素志モ其幾分ヲ貫徹スルコトヲ得ル事トモ存候

(香川家文書七二二八)

【史料5】明治三十九年六月一日付香川敬三宛三木直書翰

愚老も常磐神社宮司ノ見込失望故持屋敷諸品皆悉金方へ差向ケ先達
有志ノ尽力ニテ北三ノ丸城下杉山、小沢持屋敷特別無代佃ニテ借入
風雨ヲ凌ぎ居り候、今日ノ場合実ニ御話しノ外ニ御座候、然し国下
市ノ為ニハ尚進ンデ去ナガラ今かくと合計言語ニ述ベ難し、此上ハ

非常ノ改革致ス心得ニ付是非出京御尊顔ヲ得、移伝料トシテ金貳拾五円頂戴奉願度、出京費日夜愚考罷在候得共、工風ノ見込モ無之、不得止書中ヲ以テ奉歎願候、然ルニ先達幕大ナル〇ヲ下され一時相凌ぎ候得共、内情ノ許サヽルニ付右ノ次第ニテ誠ニ赤面ノ至リフモ顧不御内願仕り候、昨今指を腫ラシ筆ヲ取る事叶ズ故孫ニ申つけ認メサセ候間、御判じ奉願候
(香川家文書七二二二)

日露戦争の最中、日本海海戦の翌月にあたる明治三十八年六月一日に三木は、最近仕事もなく経済的に困窮している、常磐神社宮司朝倉政通の「不敬ノ行為」を指摘して内務大臣と同省神社局長に朝倉の更迭を具申した、光圀に縁深い三木氏の末裔である自分こそ常磐神社の宮司にふさわしい、ただ水戸徳川家や高橋諸随員参事官などの「障害」が予想されるので助力してほしい、と香川に訴えている(史料4)。

三木らの執拗な攻撃による心労からか、朝倉は翌年三月二十八日に脳溢血と心臓麻痺で急死した。どうやらその後釜を狙って三木のほかにも種々の運動があつたようだが(同年四月一二日付香川敬三宛武田猛書翰、香川家文書二九五四)、結局京都にいた大場景淑の子景為が宮司に就任する。父祖との縁を強調して常磐神社への奉職を熱望した三木だが、その夢も潰え去り、家屋敷を売却して借家住まいを余儀なくされた。

【史料5】は「実ニ御話しノ外」の生活を送る三木が孫に代筆を頼み、香川へ度重なる借金を申し出たものであるが、同書翰からは旧藩関係者の間でも孤立を深め、老衰や経済的困窮に苦しむ最晩年の三木の姿が浮かび上がってくる。この書翰から約半年後、明治三十九年二月一三日に三木は「優遊家に老ゆ」とは程遠い、侘しい借家暮らしのまま死去した(享年七七歳)。

四 武田金次郎の知られざる末期

明治二十八年(一八九五)三月二十八日、日清講和談判のために来日していた清国全権李鴻章が暴漢小山豊太郎に銃撃されるといふ衝撃的な事件(同月二十四日)が起こり、日清戦争をめぐる国際的な緊張が高まるなか、水戸の一隅でひっそりとその生涯を閉じた人物がいる。天狗党首領武田耕雲斎の嫡孫にして、幕末の水戸藩を闇深き暗黒恐怖の世界へと陥れたと評される、武田金次郎(一八四八—一九五、諱は蓋)である。

金次郎は、嘉永元年(一八四八)八月一日、武田耕雲斎の長男彦右衛門と妻幾子(藤田東湖の妹)の子として生まれた。元治甲子の乱で祖父耕雲斎、父彦右衛門とともに西上した金次郎だが、敦賀神保宿で加賀金沢藩に投降、遠島の刑を受け、後に小浜藩預りとなる。明治元年二月、許されて本圀寺に合流した金次郎は、同三月に命を受けて一三〇名の同志とともに東下したが、「奸人の毒刃にかかり、悉く非命に斃れた一族の仇」(坪井四郎兵衛『天保明治水戸見聞実記』知新堂、一八九四、一〇〇頁)を果たさんと復讐に燃える金次郎らが行った、江戸と水戸での諸生党への肅正の苛烈さはあまりにも有名である。帰藩後は参政へと進み、北越や弘道館などでの諸生党との戦いを指揮、明治二年七月に権大参事となったが、その間、久米幹文や青山延年をはじめ約



写真3 武田金次郎写真
(『勤皇遺烈集』勤皇事績顕彰会 昭和11年)

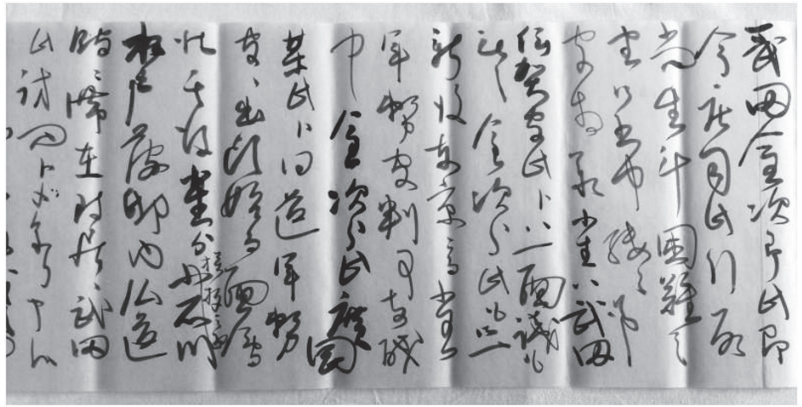


写真4 明治27年12月23日付酒泉直宛香川敬三書翰
(香川家文書5734 皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所)

五〇〇名の藩士が登城して金次郎らの行き過ぎた私刑を藩の重役に訴え出るなど、藩内では金次郎への反発も生じていた。他の藩士と同様、明治四年の廃藩置県で金次郎は免官となったが、その後の動向はようとして知れない。

しかし今回、香川家文書中に晩年の金次郎の悲惨な状況を窺い知ることのできる貴重な史料を発見した。武田猛（耕雲齋）五男、大阪や京都の地方裁判所検事など）や朝倉政通（本圀寺党、常磐神社宮司）らと共に旧水戸藩士の顕彰運動に従事していた酒泉直（本圀寺党）と香川との往復書翰に、晩年、乞食同様の生活を余儀なくされた金次郎の悲惨な姿が、生々しい描写とともに記されているのである。以下、その内容を見てみよう。

【史料6】明治二十七年二月三日付酒泉直宛香川敬三書翰

武田金次郎氏即今庄司氏引取、尚生計困難之由御書中縷々御申聞拝承、小生ハ武田伊賀守「耕雲齋」氏トハ一面識も無之、金次郎氏も御一新後東京ニ而小生軍務官判事奉職中、金次郎氏、広岡某「逸人、広岡子之次郎の養子」氏ト同道、軍務官へ出頭、始而面会仕、其後小生より挨拶之為小石川水戸藩邸内弘道館ニ滞在致居候、武田氏訪

問トシテ参り申候、右之如く一兩度之面会ニ而懇親之人ニハ無之候得共、先方よりハ其後廢藩後武田も一士人トナリシ後、度々入来、いつも金談多く俗之談話ニ而別れ候得共、小生より同氏へ惠与致候、金七十円、五十円、十円、七円杯ト度々支出致し已ニ何百円トも相成候事申ト被存候、小生ハ旧時武田氏杯ニハ願候而も拝謁被仰付候身分ニ無之者ナレトモ、同国人ニ対シ義務ハ尽し候心得ニ御座候、旧知事公「徳川昭武」ハ何千円位御惠与相成候や、御序ニ御申聞奉願候、武田伊賀守殿ハ水戸藩老職も相勤メ国事尽力種々艱難之末越の雪ト消失セ、過般 朝廷より位も贈ラセラレ候程之人故、君臣ノ義アル旧知事公コソ小生杯ノ生前面会もセヌ者トハ天地之相違故、定而旧水戸藩重臣方よりも願上、多額之金子被下候事ト奉存候、却説武田金次郎氏塩原ニありて困難ヲ極メ居ルトハ聞シカ、如何ナル様子カ不相分、同氏之近親ナル岩間「誠之」氏ニ聞きいかにも憫然ニ堪ヘス、折々少々之金子ヲ送り候得共、目前ニ其困難ノ実況ヲ見ザレハ左程トモ思ハサリシニ、過ニシ頃無抛用事アリ、一泊掛ニ而塩原へ行キシニ路边ニ小屋アリ、所謂非人小屋ノ如シ、近ツキ見レハ豈ニ斗ンヤ武田金次郎氏ナリ、小生実ニ驚愕、思ハズ流涙仕候、小生車より下リ金員ヲ出シ惠与ス、武田氏喜悅面ニ顯ハル、暫時ニシテ別ヲ告ク、其時同氏ハ起居不自由、往來人ヲ見テ平臥シ居レリ、旧時水戸侯之老臣伊ガ守之嫡孫タル者如此カト幾度カ小生落涙仕候、其後当年秋ノ末頃藤田健氏ニ面会致候、同氏之近親ナル事ハ兼而聞キシカいかなる縁辺カト相尋候所、藤田健氏之伯母ノ子則金次郎氏ナリト云、実ニ近親ナリト小生モ知ル事ヲ得タリ、然ラハ最近親ナル者ハ藤田氏、岩間氏、山口「正定」氏モ藤田氏ト近親ナルヲ以武田ト親類タルヲ不免カレ、其他ニも多々故旧知己親戚可有之、一人も手ヲ出シ候者無之事ニも有之間敷候得共、今日まで塩原途上ニ金次郎氏ヲ見セ物ニ差置候ハいかにも水戸ト云所ハ薄情

人斗リ之様ニ思ハレハセヌカ、先以小生水戸領内生れの一人ニ而難捨置旨藤田氏へも相談致候所、同氏曰ク、いつれ引取度ト庄司トモ相談中ノ由申居候間、夫ナレハ幸ナリ、早く引取之方可然、もしも塩原之途上ニ而病死等有之候時者世上の人へ何トモ申訊無之、塩原近辺ハ申ニ及ハズ、塩原へ年々出入スル浴客貴賤トナク水戸の武田金次郎タル事ヲ知ラサル人ナシ、水戸旧藩ノ恥ニ相成候間、早々引取候様藤田氏へ申入、小生より僅少ナカラ同人引取入費トシテ金五拾円義捐致候、又早速庄司氏塩原へ行キ引取候由小生迄藤田氏より報知有之候、将来も小生ハ少々之金子ハ折々恵与可致ト兼々心得居候間、小生より之義捐金者小生より直々本人カ又ハ藤田氏へ送り可申、武田氏之旧部下又ハ同家之恩顧ヲ蒙リタル人々之内へ御加へハ乍憚御免被下度候

(香川家文書五七三四〔写真4〕)

【史料7】明治二十七年二月二十五日付香川敬三宛酒泉直書翰

尚武田金次郎之數回御恵与被下候儀始て承知感佩此事奉存候、向後共尊意ニ被懸候趣、本人者勿論〔武田〕耕雲斎も於地下感涙ニ及候儀奉存候、我々者乍存行届ス、汗顔之至ニ御座候、金次郎引取之節五十金御恵与之儀承知不仕、全く藤田〔健〕、岩間〔誠之〕等ニ而操り合候事存仕候処、貴翰ニ而承知仕、誠ニ忝次第二御座候、早速ノ莊司呼寄支出方取糺追而可申上候、過日願上候義捐之儀者何之振か尊慮次第御恵与サへ被下候へハ本人取凌相付候事ニ御座候間、宜敷御含可被下候

(香川家文書五七三二五)

亡くなる約三ヶ月前、親類や友人からも見放され、栃木県那須の塩原温泉の路辺で乞食同然の悲惨な生活を送っていた金次郎に、実は香川が助けの手を差しのべていた。その零落した姿を見て「驚愕」した香川は、自分は金次郎とは数度の面識しかないにもかかわらず廃藩後に数百円の

援助を行ったが、旧主昭武や旧重臣達は一体如何ほどの援助を行ったのか、このまま金次郎を「見せ物」のように放置したあげく、もし病死でもしたら「水戸旧藩ノ恥」であると、詰問するような強い語調で金次郎周辺の薄情な対応ぶりを指弾している。

結局、香川の資金援助のもと、藤田健や岩間誠之ら親類達によって引き取られた金次郎は、その約三ヶ月後に故郷の水戸で亡くなった。享年四八歳。その墓所は水戸市内の妙雲寺にあり、祖父耕雲斎や叔父猛の傍らに、金次郎の墓碑がひっそりと建てられている(写真5)。

明治四〇年一月一日付の香川宛武田猛書翰に、大和・生野の変関係者の贈位と合わせて「姪金次郎事歴」を「別紙の通り」として香川に伝えた記述がある(香川家文書六〇七八)。残念ながらその事歴書は欠如しているが、これは香川と武田猛が金次郎顕彰の可能性を探っていたことを示唆しているよう。実際にその半年前の同年五月、金次郎は父彦右衛門や叔父魁介らと共に「特殊ノ恩命ニ浴シ」(香川家文書一一九七八)、正五位を贈位されている(『明治四十年 叙位裁可書』巻二二、国立公文書館所蔵)。



写真5 武田金次郎墓碑(妙雲寺 水戸市)

主な参考文献(香川敬三関係)

- 杉本勝二郎編 『華族列伝 国の礎』下編(国の礎編輯所 一八九五)
飯島唯一 「勤王家皇后宮大夫従二位勲一等伯爵香川敬三閣下略伝」
(鈴木成章編『水戸歴世譚』富国強兵社 一九〇七)
室伏勇 「香川敬三」(『茨城の顔』茨城新聞社 一九六九)
松平秀治 「維新前後の香川敬三とその関係文書」(『皇學館大学史料編纂所
報』第五三号 一九八二)
同 「香川敬三の履歴」(『皇學館大学史料編纂所報』第五七・五八号
一九八三)
香川擴一監修 『香川敬三履歴史料』(皇學館大学史料編纂所編 一九九二)
上野秀治 「香川敬三」(『水戸の先人たち』水戸市教育委員会 二〇一〇)
同 「香川敬三と茨城」(『水戸史学』第七八・七九号 二〇一三)
水戸市史編さん委員会編 『水戸市史』中巻五(水戸市 一九九〇)

*本稿執筆に際し、皇學館大学の上野秀治教授、久信田喜一会長をはじめ茨城
地方史研究会の皆様にご助力をいただきました。末筆ながら、記して
謝意を表します。

(近現代史部会専門調査員・茨城県立歴史館主任研究員)

引用・参考文献

- 茨城県生活環境部 1985 『茨城の特定動植物の分布—動物編—』 pp. 230
- 大場信義 1975 「ヒメボタル *Hotaria parvula* の生活史」『横須賀市博物館雑報』 21 pp. 5-8
- 大場信義 2016 「ヒメボタルの2生態型について」『全国ホタル研究会誌』 49 pp. 25-27
- 大桃定洋・斎藤修司 2007 「阿武隈山地の甲虫の記録 その4」『InsecTOUHOKU』 20 pp. 15～23
- 梯公平 2015 『保全を目的としたヒメボタルの分布と移動の特性に関する研究』（東京大学博士（農学）学位論文）
- 倉西良一 2004 「房総半島におけるヒメボタル再発見—その経緯と生息状況概観—」『房総の昆虫』 33 千葉県昆虫談話会
- 佐々木大輔・佐々木泰弘 2017 「茨城県北山地のヒメボタル」『るりぼし』 46 水戸昆虫研究会 pp. 97～98
- 栃木県立博物館所蔵品データベース 参考 URL : www.muse.pref.tochigi.lg.jp (標本番号 111933～111938)
- 水戸昆虫研究会編 1995 『茨城県の昆虫』 水戸市博物館 pp. 141

(自然部会専門調査員・茨城県立高校教員)



写真3 ヒメボタルの生息環境(地点1)



写真4 未確認地点の環境(地点11)

表2 観察地点一覧

地点	地名	標高(m)	観察日	採集・確認個体数
1	籠岩 (常陸大宮市諸沢～北富田)	350	2017年7月1日	5♂採集, 20以上♂, 2♀目撃
			2017年7月21日	1♀採集, 1♂1♀目撃
2	西金砂神社 (常陸太田市上宮河内町)	330	2017年7月8日	約10♂目撃
3	武弓 (常陸太田市上高倉町)	395	2017年7月4日	2♂採集, 約10♂目撃
4	武弓 (常陸太田市上高倉町～下高倉町)	420	2017年7月4日	約10♂目撃
5	武弓 (常陸太田市下高倉町)	330	2017年7月4日	3♂採集, 約10♂目撃
6	東金砂神社 (常陸太田市天下野町～東染町)	375	2017年7月10日	3♂採集, 約10♂目撃
7	猿喰のケヤキ (常陸太田市徳田町)	440	2017年7月19日	×
8	里美牧場 (常陸太田市里川町)	640	2017年7月19日	×
9	常陸太田市小妻町	500	2017年7月19日	×
10	日立市中深荻町	315	2017年7月6日	×
11	日立市東河内町	290	2017年7月6日	×
12	十国峠 (常陸太田市西河内町)	275	2017年7月10日	×
13	真弓山 (常陸太田市真弓町)	260	2017年7月14日	×

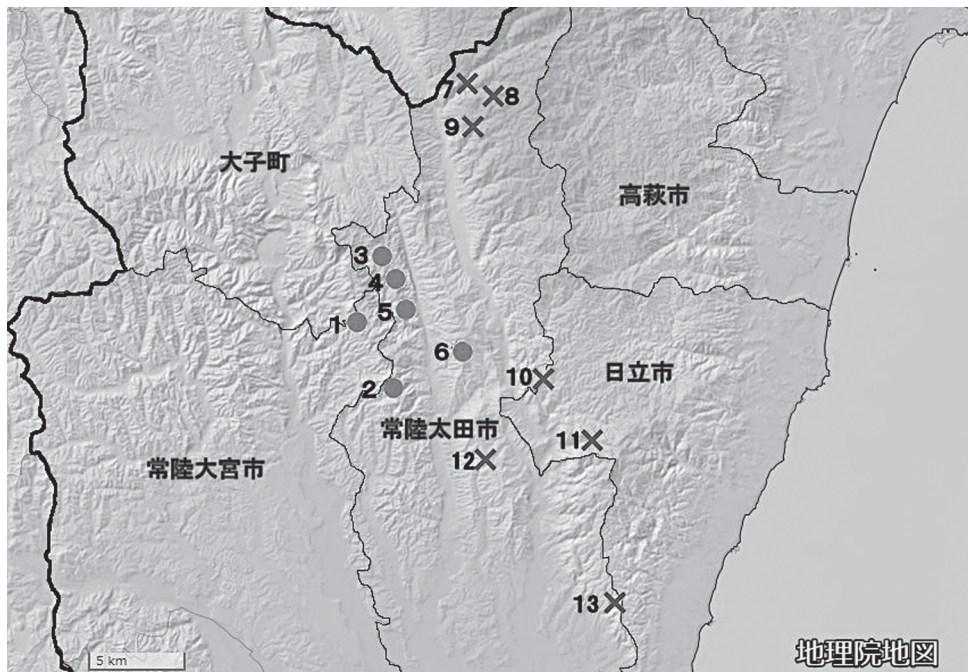


図1 ヒメボタル調査地点(●は確認地点, ×は未確認地点)
 出典:国土地理院ウェブサイト(<http://maps.gsi.go.jp>), 地理院マップシート
 (http://renkei2.gsi.go.jp/renkei/130326mapsh_gijutu/)を用いて作成

ヒメボタル新生息地

今年の昆虫調査で夜間採集を行った際、2017年（平成29）7月1日に常陸大宮市諸沢でヒメボタルを確認することができた（写真1）。その後付近の山地での生息地も確認することもできた。

今回の調査地点と環境写真を写真2～4、表2、図1に示す。里川を挟んだ西側の山地のほぼすべての調査地点で見られたが、東側の山地ではどの地点においても確認することはできなかった。7月21日に地点1で再度ヒメボタルを確認しているため東側の観察時期に問題はなかったと思われる。

大場によると [大場 2016]、この地域に分布する本種は、雄の体長が 7.3 ± 0.8 mm ($n = 12$)、発光感覚が 0.6～1.2 秒に 1 回であったことから、筑波山と同様東北地方に幅広く分布する大型タイプであると考えられる。観察時間は地点1を除いて30分～1時間であったが、どの地点においても、夜中0時前後に発光を始めた。地点1では、深夜3時過ぎまで観察していたが、時が進むにつれ、飛翔する雄の数は増していった。地点7～13では、本種が確認された1～6地点と植生や林床等の環境が似ているにも関わらず、確認できなかった。山が険しい籠岩や武生周辺と比べ、里美村～真弓山周辺は比較的山がなだらかで戦前から放牧や林業が盛んであるため、土地利用が本種の分布に影響を与えているのではないかと考えられるが、調査が不十分なため今後の課題である。

今まで県内の記録が少なかったのは、本種の活動時間帯が0時以降と夜遅く、普段目にするのがなかったからであって、今後深夜に調査する人が増えれば新産地は自ずと増えていくと思われる。常陸大宮市でも尺丈山、鷲子山、御前山系からも記録される可能性があると考えている。



写真1 常陸大宮市で確認したヒメボタル
（常陸大宮市諸沢 2017年7月1日撮影）

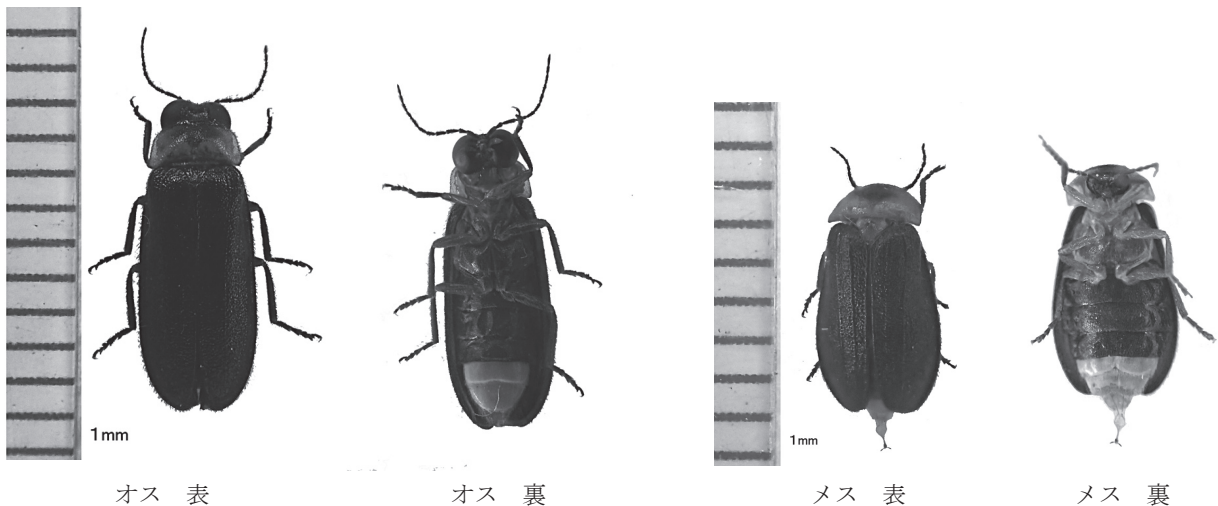


写真2 ヒメボタル雌雄（♂は2017年7月1日諸沢，♀は2017年7月21日諸沢での採集個体）

<研究ノート>

常陸大宮市でヒメボタルを確認

佐々木 泰弘




はじめに

常陸大宮市でヒメボタル *Luciola parvula* の生息地を確認したので報告する。ヒメボタルは県北山地での確実な記録が近年なかった種である。なお、本原稿の文章・図表の多くは「茨城県北山地のヒメボタル」[佐々木・佐々木 2017] から引用した。

茨城県のホタルについて

ホタルは発光する昆虫として有名である。茨城県内からホタル科の昆虫は、20種ほど確認されているが、その中で目立つ光を放つのは3種だけである。ゲンジボタル *Luciola cruciata*、ヘイケボタル *Luciola lateralis*、とヒメボタル *Luciola parvula* である(表1)。ゲンジボタルとヘイケボタルは県内に局所的ではあるが広く生息していることが知られていた。しかし、両種とも近年生息地の減少が見られ、ゲンジボタルは茨城県の準絶滅危惧種に指定されている。現在、常陸大宮市で進めている生物調査では、ゲンジボタル、ヘイケボタルとも市内にわりと広く分布していることがわかってきた。

表1 ホタル3種の区別点と特徴

ゲンジボタル <i>Luciola cruciata</i> 赤色部の黒帯は狭く中央が少し膨らむ	ヘイケボタル <i>Luciola lateralis</i> 赤色部の黒帯は広く平行である	ヒメボタル <i>Luciola parvula</i> 赤色部の黒帯は逆三角形である
 体長:15~20mm 時期:5月~7月 生息地:カワニナのいる小川周辺に見られる	 体長:7~12mm 時期:5月~8月 生息地:タニシなどのいる水田や湿地周辺に見られる	 体長:6~10mm 時期:6月~7月 生息地:やや湿った森の中に見られる

もう1種のヒメボタルは、県内では、筑波山[水戸昆虫研究会編 1995]と、日付不明だが1994年(平成6)に旧水府村の武生林道での記録があるのみであった[茨城県生活環境部 1985]。近年、確実な生息地として確認されてきたのは筑波山の山頂付近だけからであった。

ヒメボタルについて

ヒメボタルは、陸生ホタルの1種で、本州・四国・九州に分布する。成虫は6月~7月の頃、低地~山地に発生し、雄は、ゲンジボタルやヘイケボタルの黄緑色の発光とは異なり、黄金色に近い発光を短時間に繰り返す(1秒に約2回)。地域によって体サイズや発光パターン等が異なることから、本種には小型タイプと大型タイプの二生態型があるとされている[大場 2016]。また、雌は後翅が退化しているため飛翔できない(図1・2)。幼虫の生態については[梯 2015]に詳しい。

茨城県周辺では、千葉県[倉西 2004]・栃木県[栃木県立博物館所蔵品データベース]・福島県[大場 1975]で報告があるが、[大桃・斎藤 2007]を参照したところ、福島県では阿武隈山地においての記録はなかった。

文献に見られる常陸大宮市の植物 (1)

藤田弘道・安昌美 2009 「陰陽山（常陸大宮市）の植物」『茨城植物研究2』

(藤田弘道：自然部会専門調査員・茨城生物の会／中崎保洋：自然部会協力員・茨城生物の会)

セッコク	ヒナラン	ミヤマウズラ
トンボソウ	ベニシュスラン	ムギラン
ネジバナ	ホクリクムヨウラン	
ヒトツボクロ	マメツタラン	

まとめ

文献で確認された種類数（亜種・変種・品種も1種類とした）は次の通りである。

シダ植物	・ ・ ・ ・ ・	23 科	148 種類
種子植物	裸子植物	・ ・ ・ ・ ・	5 科 10 種類
被子植物			
双子葉植物			
離弁花類	・ ・ ・ ・ ・	71 科	517 種類
合弁花類	・ ・ ・ ・ ・	33 科	320 種類
単子葉植物	・ ・ ・ ・	19 科	338 種類
合 計		151 科	1333 種類

おわりに

これまでに発表された常陸大宮市内の植物に関する一部の文献をもとに目録にまとめてみた。さらに、本市の植物に関しては、『美和村史』や『茨城県レッドデータブック』などいくつかの文献がある。それらについても今後調べてまとめてみたい。

引用・参考文献

- 茨城植物研究会 1986 「茨城県の植物ニュース（1）」『茨城植物研究1』
- 茨城植物研究会 2009 「茨城県の植物ニュース（2）」『茨城植物研究2』
- 茨城植物研究会 2010 「茨城県の植物ニュース（3）」『茨城植物研究3』
- 茨城植物研究会 2012 「茨城県の植物ニュース（4）」『茨城植物研究4』
- 茨城植物研究会 2013 「茨城県の植物ニュース（5）」『茨城植物研究5』
- 茨城植物研究会 2015 「茨城県の植物ニュース（6）」『茨城植物研究6』
- 内山治男・中崎保洋 2010 「三王山（常陸大宮市）の植物」『茨城植物研究3』
- 内山治男 2012 「茨城県の植物観察記録（3）」『茨城植物研究4』
- 内山治男 2013 「茨城県の植物観察記録（4）」『茨城植物研究5』
- 内山治男・藤田弘道 2013 「エンシュウムヨウラン（ラン科）を茨城県に記録する」『茨城植物研究5』
- 環境庁自然保護局 1994 『自然環境保全基礎調査 植物目録修正版上下』環境庁自然保護局
- 清水修・安昌美・藤田弘道・中崎保洋・和田尚幸 1986 「久慈山地北部の植物相」『茨城植物研究1』
- 清水修・安昌美・安見珠子・藤田弘道・中崎保洋・和田尚幸・野口達也・内山治男 2009 「盛金富士（常陸大宮市）の植物」『茨城植物研究2』
- 鈴木昌友・清水修・安見珠子・安昌美・藤田弘道・中崎保洋・和田尚幸・野口達也 1981 『茨城県植物誌』茨城県植物誌刊行会
- 中崎保洋・藤田弘道 2015 「井殿山（常陸大宮市）の植物」『茨城植物研究6』
- 野口達也 2010 「茨城県産種子植物の観察（2）」『茨城植物研究3』
- 藤田弘道 2009 「茨城県産植物分布資料（1）」『茨城植物研究2』

ウキクサ科

アオウキクサ
ウキクサ

ミクリ科

ミクリ

ガマ科

ガマ
コガマ
ヒメガマ

カヤツリグサ科

アイバソウ
アオスゲ
アズマスゲ
アゼガヤツリ
アゼスゲ
アゼナルコ
アブラガヤ
アワボスゲ
イトアオスゲ
イヌホタルイ
ウシクグ
エナシヒゴクサ
オオハリイ
オタルスゲ
オニスゲ
カサスゲ
カヤツリグサ
カワラスガナ
カワラスゲ
カンスゲ
クグガヤツリ
クサスゲ
クシロヤガミスゲ
クログワイ
クロヒナスゲ
ケスゲ
ケハガクレスゲ
コイヌノハナヒゲ
ゴウソ
コカンスゲ
コゴメガヤツリ
コジュズスゲ
サナギスゲ
サンカクイ
シカクイ

シデアブラガヤ
シバスゲ
ジュズスゲ
シラコスゲ
シラスゲ
シロイトスゲ
スナジスゲ
センダイスゲ
タガネソウ
タカネマスキサ
タニガワスゲ
タヌキラン
タマガヤツリ
タマツリスゲ
チャイロググガヤツリ
チャガヤツリ
ツクバスゲ
テキリスゲ
テンツキ
ナガミノヒメカンスゲ
ナキリスゲ
ナルコスゲ
ノゲヌカスゲ
ハリイ
ハリガネスゲ
ヒカゲスゲ
ヒゴクサ
ヒデリコ
ヒナガヤツリ
ヒナスゲ
ヒメアオスゲ
ヒメガヤツリ
ヒメカンスゲ
ヒメクグ
ヒメゴウソ
ヒメシラスゲ
ヒメヒラテンツキ
ヒラボガヤツリ
ビロードスゲ
ヒンジガヤツリ
ホソバヒカゲスゲ
ホタルイ
マスクサ
マツカサスキ
マツバイ

マツバスゲ
ミツカドシカクイ
ミヤマカンスゲ
ミヤマジュズスゲ
ミヤマシラスゲ
メアオスゲ
モエギスゲ
ヤマアゼスゲ
ヤマイ
ヤワラスゲ
ユメノシマガヤツリ

ラン科

アオフタバラン
アケボノシュスラン
イチョウラン
ウチョウラン
エビネ
エンシュウムヨウラン
オオバノトンボソウ
オニノヤガラ
カキラン
カヤラン
キンセイラン
キンラン
ギンラン
クマガイソウ
クモキリソウ
サイハイラン
サギソウ
ササバギンラン
ジガバチソウ
シュスラン
シュンラン



写真8 シュンラン

イネ科

アオカモジグサ
 アキノエノコログサ
 アキメヒシバ
 アシボソ
 アズマガヤ
 アズマザサ
 アズマネザサ
 アブラススキ
 イチゴツナギ
 イヌビエ
 イヌムギ
 ウキガヤ
 ウシクサ
 ウシノシッペイ
 ウマノチャヒキ
 ウラゲスズ
 エノコログサ
 オオアブラススキ
 オオアワガエリ
 オオイチゴツナギ
 オオウシノケグサ
 オオエノコロ
 オオクサキビ
 オオスズメノテッポウ
 オオニワホコリ
 オカメザサ
 オガルカヤ
 オギ
 オニウシノケグサ
 オヒシバ
 カズノコグサ
 カゼクサ
 カニツリグサ
 カモガヤ
 カモジグサ
 カラスムギ
 キダチノネズミガヤ
 キタメヒシバ
 キツネガヤ
 ギョウギシバ
 キンエノコロ
 クサヨシ
 クマザサ
 ケスズ

ケチヂミザサ
 ケナシチガヤ
 コウボウ
 コウヤザサ
 コスズメガヤ
 コチヂミザサ
 コツブキンエノコロ
 コヌカグサ
 コバンソウ
 コブナグサ
 コメガヤ
 コメヒシバ
 ササガヤ
 ササクサ
 サヤヌカグサ
 シナダレスズメガヤ
 シバ
 シラゲガヤ
 ススキ
 スズタケ
 スズメノカタビラ
 スズメノチャヒキ
 スズメノテッポウ
 スズメノヒエ
 センダイザサ
 タイヌビエ
 タチカモジグサ
 タツノヒゲ
 タマミゾイチゴツナギ
 チカラシバ
 チゴザサ
 チョウセンガリヤス
 ツルスズメノカタビラ
 ツルヨシ
 ドジョウツナギ
 トダシバ
 トボシガラ
 ナガハグサ
 ナガボカニツリ
 ナギナタガヤ
 ナルコビエ
 ニッコウザサ
 ニワホコリ
 ヌカキビ
 ヌカボ

ヌメリグサ
 ネズミガヤ
 ネズミノオ
 ノガリヤス
 ハイヌメリ
 ハチク
 ハルガヤ
 ヒメアシボソ
 ヒメノガリヤス
 ヒロハウシノケグサ
 フクロダガヤ
 フシゲチガヤ
 フシネキンエノコロ
 ホソバスズタケ
 ホソムギ
 マコモ
 マダケ
 ミゾイチゴツナギ
 ミヤコザサ
 ムラサキエノコロ
 メガルカヤ
 メダケ
 メヒシバ
 メリケンカルカヤ
 モウソウチク
 ヤダケ
 ヤマアワ
 ヤマカモジグサ
 ヤマヌカボ
 ヤマミゾイチゴツナギ
 ヨシ

ヤシ科

シュロ

サトイモ科

ウラシマソウ
 オオマムシグサ
 カラスビシャク
 ザゼンソウ
 ショウブ
 セキショウ
 トウゴクマムシグサ
 マムシグサ
 ミミガタテンナンショウ
 ムラサキマムシグサ

フキ



写真6 フキ

- フクオウソウ
- ブタクサ
- ブタナ
- ベニバナボロギク
- ヘラバヒメジョオン
- ホウキギク
- ミヤコアザミ
- ミヤマヤブタバコ
- メナモミ
- モミジガサ
- ヤクシソウ
- ヤハズハハコ
- ヤブタバコ
- ヤブタビラコ
- ヤブレガサ
- ヤマニガナ
- ヤマハハコ
- ユウガギク
- ヨモギ
- リュウノウギク

<単子葉植物>

オモダカ科

- アギナシ
- ウリカワ
- オモダカ
- サジオモダカ
- ヘラオモダカ

トチカガミ科

- クロモ
- ミズオオバコ
- ヤナギスブタ

ヒルムシロ科

- イトモ
- エビモ

ヒルムシロ

ヤナギモ

イバラモ科

- イトトリゲモ
- ホッスモ

ユリ科

- アマドコロ
- アマナ
- イワギボウシ
- ウバユリ
- エンレイソウ
- オオバギボウシ
- オオバジャノヒゲ
- カタクリ
- キツネノカミソリ
- キバナノアマナ
- コバギボウシ
- サルトリイバラ
- シオデ
- ジャノヒゲ
- ショウジョウバカマ
- タカサゴユリ
- タチシオデ
- チゴユリ
- ツクバネソウ
- ツルボ
- ナガバジャノヒゲ
- ナツズイセン
- ナルコユリ
- ニラ
- ノカンゾウ
- ノビル
- ヒガンバナ
- ヒメニラ
- ヒメヤブラン
- ホウチャクソウ
- ミヤマスカシユリ
- ミヤマナルコユリ
- ヤブカンゾウ
- ヤブラン
- ヤマガシユウ
- ヤマジノホトトギス

ヤマユリ



写真7 ヤマユリ

ワニグチソウ

ヤマノイモ科

- オニドコロ
- キクバドコロ
- タチドコロ
- ヤマノイモ

ミズアオイ科

コナギ

アヤメ科

- アヤメ
- キショウブ
- シャガ
- ニワゼキショウ
- ノハナショウブ
- ヒオウギ

イグサ科

- アオコウガイゼキショウ
- イ
- クサイ
- コウガイゼキショウ
- スズメノヤリ
- ヌカボシソウ
- ハナビゼキショウ
- ハリコウガイゼキショウ
- ヒロハノコウガイゼキショウ
- ヤマスズメノヒエ

ツユクサ科

- イボクサ
- ツユクサ
- ヤブミョウガ

ホシクサ科

- イトイヌノヒゲ
- ヒロハイヌノヒゲ
- ホシクサ

ニシキウツギ
 ニワトコ
 ハヤザキヒョウタンボク
 ベニバナツクバネウツギ
 ミヤマウグイスカグラ
 ミヤマガマズミ
 ヤブデマリ
 ヤマウグイスカグラ
レンブクソウ科
 レンブクソウ
オミナエシ科
 オトコエシ
 オミナエシ
 ツルカノコソウ
マツムシソウ科
 ナベナ
キキョウ科
 アゼムシロ
 キキョウ
 シデシャジン
 ソバナ
 タニギキョウ
 ツリガネニンジン
 ツルニンジン
 ホタルブクロ
 ロベリアソウ
キク科
 アカミタンポポ
 アキノキリンソウ
 アキノノゲシ
 アキノハハコグサ
 アズマギク
 アズマヤマアザミ
 アメリカオニアザミ
 アメリカセンダングサ
 アメリカタカサブロウ
 アラゲハンゴンソウ
 イナカギク
 イヌヨモギ
 イワニガナ
 イワヨモギ
 ウスギタンポポ
 エゾタンポポ
 オオアレチノギク
 オオアワダチソウ

オオオナモミ
 オオキンケイギク
 オオジシバリ
 オオニガナ
 オオブタクサ
 オカオグルマ
 オキナグサ
 オクモミジハグマ
 オグルマ
 オケラ
 オトコヨモギ
 オニタビラコ
 オニノゲシ
 オヤマボクチ
 オヤリハグマ
 カコマハグマ
 カシワバハグマ
 カセンソウ
 カミツレモドキ
 カワラニガナ
 カワラハハコ
 カワラヨモギ
 ガンクビソウ
 カントウタンポポ
 カントウヨメナ
 キクアザミ
 キクイモ
 キクタニギク
 キッコウハグマ
 キツネアザミ
 ケナシヒメムカシヨモギ
 ケムラサキニガナ
 コウゾリナ
 コウヤボウキ
 コオニタビラコ
 コシロノセンダングサ
 コセンダングサ
 ゴマナ
 コメナモミ
 コヤブタバコ
 サジガンクビソウ
 サワヒヨドリ
 シュウブンソウ
 シラヤマギク
 シロバナタンポポ

シロバナニガナ
 シロヨメナ
 セイタカアワダチソウ
 セイヨウタンポポ
 セイヨウノコギリソウ
 センダイトウヒレン
 センダングサ
 センボンヤリ
 タイアザミ
 タウコギ
 タカサゴソウ
 タカサブロウ
 タマブキ
 ダンドボロギク
 チチコグサ
 チチコグサモドキ
 トキンソウ
 ナガバノコウヤボウキ
 ニガナ
 ノアザミ



写真5 ノアザミ

ノゲシ
 ノコンギク
 ノッポロガンクビソウ
 ノニガナ
 ノハラアザミ
 ノブキ
 ノボロギク
 ハキダメギク
 ハハコグサ
 ハバヤマボクチ
 ハルジオン
 ヒメシオン
 ヒメジョオン
 ヒメムカシヨモギ
 ヒヨドリバナ
 ヒレアザミ

ハシカグサ	ジャコウソウ	ウリクサ
ヒメヨツバムグラ	ジュウニヒトエ	オオイヌノフグリ
フタバムグラ	シラゲヒメジソ	オオヒナノウスツボ
ヘクソカズラ	シロバナキランソウ	キクモ
ホソバノヨツバムグラ	タカクマヒキオコシ	クチナシグサ
ヤエムグラ	ツクバキンモンソウ	クワガタソウ
ヤマムグラ	ツルニガクサ	コシオガマ
ヨツバムグラ	テンニンソウ	サワトウガラシ
ヒルガオ科	トウゴクシソバタツナミ	シソクサ
アメリカネナシカズラ	トウバナ	スズメノトウガラシ
コヒルガオ	ナギナタコウジュ	タケトアゼナ
ネナシカズラ	ニガクサ	タチイヌノフグリ
ハマヒルガオ	ハッカ	トキワハゼ
ヒルガオ	ヒイラギソウ	ヒキヨモギ
マルバアサガオ	ヒメオドリコソウ	ママコナ
マルバルコウ	ヒメジソ	ミゾホオズキ
ムラサキ科	ヒメシロネ	ミヤマママコナ
キュウリグサ	フトボナギナタコウジュ	ムシクサ
サワリソウ	ホトケノザ	ムラサキサギゴケ
ハナイバナ	ミヤマナミキ	ヤマサギゴケ
ホタルカズラ	ヤマタツナミソウ	キツネノマゴ科
クマツヅラ科	ヤマハッカ	キツネノマゴ
カリガネソウ	ラショウモンカズラ	ハグロソウ
クサギ	レモンエゴマ	イワタバコ科
コムラサキ	ナス科	イワタバコ
ムラサキシキブ	アメリカイヌホオズキ	ハマウツボ科
ヤブムラサキ	イガホオズキ	ナンバンギセル
シソ科	イヌホオズキ	ヤセウツボ
アキノタムラソウ	クコ	ハエドクソウ科
イヌコウジュ	シロバナチョウセンアサガオ	ナガバハエドクソウ
イヌゴマ	センナリホオズキ	ハエドクソウ
イヌトウバナ	テリミノイヌホオズキ	オオバコ科
イブキジャコウソウ	ハダカホオズキ	オオバコ
ウツボグサ	ヒヨドリジョウゴ	ツボミオオバコ
オカタツナミソウ	マルバノホロシ	ヘラオオバコ
オドリコソウ	ヤマホロシ	スイカズラ科
オランダハッカ	ワルナスビ	ウグイスカグラ
カキドオシ	フジウツギ科	オオツクバネウツギ
カワミドリ	フジウツギ	オトコヨウゾメ
キセワタ	ゴマノハグサ科	ガマズミ
キバナアキギリ	アゼトウガラシ	コウグイスカグラ
キランソウ	アゼナ	コバノガマズミ
クルマバナ	アブノメ	スイカズラ
コシロネ	アメリカアゼナ	ソクズ
シソ	イヌノフグリ	ツクバネウツギ

ヒシ科

ヒシ

アカバナ科

アカバナ
アレチマツヨイグサ
ウスゲチョウジタデ
オオマツヨイグサ
コマツヨイグサ
タニタデ
チョウジタデ
ノダアカバナ
ミズタマソウ
メマツヨイグサ
ユウゲショウ

アリノトウグサ科

アリノトウグサ
ホザキノフサモ

ウリノキ科

ウリノキ

ミズキ科

アオキ
クマノミズキ
ハナイカダ
ミズキ
ヤマボウシ

ウコギ科

ウド
カクレミノ
キヅタ
コシアブラ
タカノツメ
タラノキ
トチバニンジン
ハリギリ
メダラ
ヤツデ
ヤマウコギ

セリ科

イブキボウフウ
ウマノミツバ
オオチドメ
オオバチドメ
オヤブジラミ
カノツメソウ
シヤク

シラネセンキュウ

セリ

セントウソウ

タニミツバ

チドメグサ

ヌマゼリ

ノダケ

ノチドメ

ハナウド

ヒメチドメ

ホタルサイコ

ミツバ

ムカゴニンジン

ヤブジラミ

ヤブニンジン

ヤマゼリ

<合弁花類>

イワウメ科

イワウチワ

リョウブ科

リョウブ

イチヤクソウ科

アキノギンリョウソウ
イチヤクソウ
ウメガサソウ
ギンリョウソウ
シヤクジョウソウ

ツツジ科

アセビ
アブラツツジ
ウスノキ
シロヤシオ
トウゴクミツバツツジ
ナツハゼ
ネジキ
バイカツツジ
ヒカゲツツジ
ヤマツツジ
レンゲツツジ

ヤブコウジ科

カラタチバナ
マンリョウ
ヤブコウジ

サクラソウ科

イヌヌマトラノオ
オカトラノオ
コナスビ
ヌマトラノオ
ミヤマタゴボウ

カキノキ科

カキノキ

エゴノキ科

エゴノキ
オオバアサガラ
ハクウンボク

ハイノキ科

サワフタギ

モクセイ科

イボタノキ
ケアオダモ
トウネズミモチ
ネズミモチ
ヒイラギ
マルバアオダモ

マチン科

アイナエ

リンドウ科

アケボノソウ
ユケリンドウ
センブリ
ツルリンドウ
フデリンドウ
リンドウ

キョウチクトウ科

テイカカズラ

ガガイモ科

オオカモメヅル
ガガイモ
コイケマ
コバノカモメヅル
タチガシワ

アカネ科

アカネ
オオバノヤエムグラ
オオフタバムグラ
キヌタソウ
クルマムグラ
ツルアリドオシ

フウロソウ科

アメリカフウロ
 ゲンノショウコ
 コフウロ
 タチフウロ
 フシゲタチフウロ

トウダイグサ科

アカメガシワ
 エノキグサ
 オオニシキソウ
 コニシキソウ
 シラキ
 タカトウダイ
 トウダイグサ
 ニシキソウ
 ヒメミカンソウ
 ビロードエノキグサ

ミカン科

アサクラザンショウ
 イヌザンショウ
 ウチダシミヤマシキミ
 カラスザンショウ
 キハダ
 コクサギ
 サンショウ
 フユザンショウ
 マツカゼソウ
 ミヤマシキミ

ニガキ科

ニガキ

ヒメハギ科

ヒメハギ

ドクウツギ科

ドクウツギ

ウルシ科

ウルシ
 ツタウルシ
 スルデ
 ヤマウルシ

カエデ科

イロハモミジ
 ウラゲエンコウカエデ
 ウリカエデ
 ウリハダカエデ
 エンコウカエデ

オオモミジ
 オニイタヤ
 コハウチワカエデ
 チドリノキ
 ヒトツバカエデ

ミツデカエデ
 メグスリノキ

アワブキ科

アワブキ
 ミヤマハハソ

ツリフネソウ科

キツリフネ
 ツリフネソウ

モチノキ科

アオハダ
 イヌツゲ
 ウメモドキ

モチノキ

ニシキギ科

イヌツルウメモドキ
 オオツルウメモドキ
 オニツルウメモドキ
 コマユミ
 ツリバナ
 ツルウメモドキ
 ツルマサキ
 ニシキギ
 マユミ

ミツバウツギ科

ゴンズイ
 ミツバウツギ

クロウメモドキ科

クマヤナギ
 クロウメモドキ
 ケンポナシ

ブドウ科

エビヅル
 サンカクヅル
 ツタ
 ノブドウ

ヤブガラシ

シナノキ科

カラスノゴマ

ジンチョウゲ科

コガンピ

ミツマタ

グミ科

アキグミ
 ツルグミ
 ナツグミ

イイギリ科

イイギリ

スミレ科

アオイスミレ
 アカネスミレ
 アギスミレ
 アケボノスミレ
 エイザンスミレ
 オカスミレ
 ケタチツボスミレ
 コスミレ
 コミヤマスミレ
 シロバナタチツボスミレ
 スミレ
 タチツボスミレ
 ツボスミレ
 ナガハシスミレ
 ニオイタチツボスミレ
 ノジスミレ
 ヒカゲスミレ
 ヒナスミレ
 ヒメスミレ
 フモトスミレ
 マキノスミレ
 マルバスミレ

キブシ科

キブシ

ミゾハコベ科

ミゾハコベ

ウリ科

アマチャヅル
 アレチウリ
 カラスウリ
 キカラスウリ
 スズメウリ

ミソハギ科

キカシグサ
 ヒメミソハギ
 ミズマツバ
 ミソハギ

クサアジサイ
 ケバイカウツギ
 コアジサイ
 コチャルメルソウ
 ダイモンジソウ
 タキノアシ
 タマアジサイ
 チダケサシ
 ツルネコノメソウ
 トリアシショウマ
 ニッコウネコノメ
 ネコノメソウ
 ノリウツギ
 ハナネコノメ
 ヒメウツギ
 ビロードウツギ
 ムカゴネコノメソウ
 ヤマアジサイ
 ヤマネコノメソウ
 ユキノシタ

バラ科

アイズシモツケ
 アズキナシ
 イヌザクラ
 ウラジロノキ
 ウワミズザクラ
 エドヒガン
 エビガライチゴ
 オオズミ
 オヘビイチゴ
 カスミザクラ
 カワラサイコ
 キジムシロ
 キンミズヒキ
 クサイチゴ
 クサボケ
 クマイチゴ
 ケカマツカ
 コゴメウツギ
 シモツケ
 ズミ
 ダイコンソウ
 タチゲヒメヘビイチゴ
 チョウジザクラ
 ツルキンバイ

テリハノイバラ
 ナワシロイチゴ
 ニガイチゴ
 ノイバラ
 ヒメキンミズヒキ
 フユイチゴ
 ヘビイチゴ
 ミツバツチグリ
 ミツモトソウ
 ミヤマフユイチゴ
 モミジイチゴ
 モリイバラ
 ヤブヘビイチゴ
 ヤマザクラ
 ヤマナシ
 ヤマブキ
 ユキヤナギ
 ワレモコウ

マメ科

アカツメクサ
 アメリカツノクサネム
 アレチヌスビトハギ
 イタチハギ
 イヌエンジュ
 イヌハギ
 ウスバヤブマメ
 オオバクサフジ
 オオバタンキリマメ
 カスマグサ
 カワラケツメイ
 キダチコマツナギ
 キハギ
 クサネム
 クズ
 クスダマツメクサ
 クララ
 ケヤブハギ
 ゲンゲ
 コマツナギ
 サイカチ
 ジャケツイバラ
 シロツメクサ
 スズメノエンドウ
 タチオランダゲンゲ
 タチゲキハギ

タヌキマメ
 ツクシハギ
 ツルフジバカマ
 ツルマメ
 ヌスビトハギ
 ネコハギ
 ネムノキ
 ノアズキ
 ノササゲ
 ハイメドハギ
 ハリエンジュ
 フジ



写真4 フジ

フジカンゾウ
 フジキ
 ホドイモ
 マキエハギ
 マルバナヌスビトハギ
 マルバハギ
 マルバヤハズソウ
 ミヤコグサ
 ミヤマタニワタシ
 メドハギ
 ヤハズエンドウ
 ヤハズソウ
 ヤブツルアズキ
 ヤブハギ
 ヤブマメ
 ヤマハギ
 ヨツバハギ
 レンリソウ

カタバミ科

イモカタバミ
 エゾタチカタバミ
 オッタチカタバミ
 カタバミ
 ミヤマカタバミ

モクレン科

コブシ

ホオノキ

マツブサ科

サネカズラ

マツブサ

シキミ科

シキミ

クスノキ科

アブラチャン

クロモジ

シロダモ

ダンコウバイ

ヤマコウバシ

フサザクラ科

フサザクラ

キンポウゲ科

アキカラマツ

アズマイチゲ

イチリンソウ

イヌショウマ

ウマノアシガタ

オオバショウマ

オトコゼリ

キクザキイチゲ

キツネノボタン

クサボタン

ケキツネノボタン

コボタンヅル

サラシナショウマ

シュウメイギク

スハマソウ

センニンソウ

ツクバトリカブト

トウゴクサバノオ

ニリンソウ

ハンショウヅル

フクジュソウ

ボタンヅル

ヤマキツネノボタン

レンゲショウマ

メギ科

イカリソウ

ナンテン

メギ

ルイヨウボタン

アケビ科

アケビ

ミツバアケビ

ムベ

ツツラフジ科

アオツツラフジ

コウモリカズラ

ツツラフジ

マツモ科

マツモ

ドクダミ科

ドクダミ

センリョウ科

ヒトリシズカ

フタリシズカ

ウマノスズクサ科

ウスバサイシン

ウマノスズクサ

フタバアオイ

ボタン科

ヤマシヤクヤク

マタタビ科

サルナシ

マタタビ

ツバキ科

サカキ

チャノキ

ナツツバキ

ヒサカキ

ヤブツバキ

オトギリソウ科

オトギリソウ

コケオトギリ

トモエソウ

ケシ科

クサノオウ

ジロボウエンゴサク

タケニグサ

ナガミノツルキケマン

ホソバヤマブキソウ

ミヤマキケマン

ムラサキケマン

ヤマエンゴサク

ヤマブキソウ

アブラナ科

イヌガラシ

イヌナズナ

オオバタネツケバナ

オランダガラシ

カラシナ

キレハイヌガラシ

グンバイナズナ

コンロンソウ

ショカツサイ

スカシタゴボウ

セイヨウアブラナ



写真3 セイヨウアブラナの群落

タチタネツケバナ

タネツケバナ

ナズナ

ハクサンハタザオ

ハルザキヤマガラシ

ホソミナズナ

マメグンバイナズナ

マルバコンロンソウ

ミチバタガラシ

ヤマハタザオ

ユリワサビ

ワサビ

マンサク科

オオバマンサク

ベンケイソウ科

アオノイワレンゲ

キリンソウ

コモチマンネングサ

マルバマンネングサ

ミツバベンケイソウ

ユキノシタ科

アカショウマ

イワガラミ

ウツギ

カワヤナギ
 タチヤナギ
 バッコヤナギ
 ヤマナラシ
カバノキ科
 アカシデ
 イヌシデ
 オノオレカンバ
 クマシデ
 ケヤマハンノキ
 サワシバ
 ツノハシバミ
 ハンノキ
 ミヤマヤシャブシ
ブナ科
 アカガシ
 アラカシ
 イヌブナ
 ウラジログアシ
 クヌギ
 クリ
 コナラ
 シラカシ
 スダジイ
 ツクバネガシ
 ブナ
 ミズナラ
ニレ科
 エゾエノキ
 エノキ
 ケヤキ
 ハルニレ
クワ科
 イタビカズラ
 カナムグラ
 カラハナソウ
 クワクサ
 ヒメコウゾ
 ヤマグワ
イラクサ科
 アオカラムシ
 アオミズ
 ウワバミソウ
 カテンソウ
 カラムシ

クサコアカソ
 コアカソ
 コケミズ
 トキホコリ
 ナガバヤブマオ
 ミズ
 ミヤマイラクサ
 ムカゴイラクサ
 メヤブマオ
 ヤブマオ
 ヤマトキホコリ
 ヤマミズ
ビャクダン科
 カナビキソウ
 ツクバネ
タデ科
 アキノウナギツカミ
 イシミカワ
 イタドリ
 イヌタデ
 エゾノギシギシ
 オオイタドリ
 オオイヌタデ
 オオケタデ
 オオネバリタデ
 オオハルタデ
 オオミゾソバ
 ギシギシ
 ギンミズヒキ
 ケイタドリ
 サクラタデ
 シンミズヒキ
 スイバ
 タニソバ
 ツルドクダミ
 ナガボハナタデ
 ネバリタデ
 ハナタデ
 ハルタデ
 ハルトラノオ
 ヒメスイバ
 ボントクタデ
 ママコノシリヌグイ
 ミズヒキ
 ミゾソバ

ミチヤナギ
 ミヤマタニソバ
 ヤナギタデ
 ヤノネグサ
 ヤマミゾソバ
ヤマゴボウ科
 ヨウシュヤマゴボウ
ザクロソウ科
 クルマバザクロソウ
 ザクロソウ
スベリヒユ科
 スベリヒユ
ナデシコ科
 ウシハコベ
 オオヤマハコベ
 オランダミミナグサ
 カワラナデシコ
 ケフシグロ
 コハコベ
 サワハコベ
 ツメクサ
 ナンバンハコベ
 ネバリノミノツヅリ
 ノハラナデシコ
 ノミノツヅリ
 ノミノフスマ
 フシグロ
 フシグロセンノウ
 ミドリハコベ
 ミミナグサ
 ミヤマハコベ
 ムシトリナデシコ
 ワダソウ
アカザ科
 イワアカザ
 ケアリタソウ
 シロザ
ヒユ科
 イヌビユ
 ヒカゲイノコズチ
 ヒナタイノコズチ
 ホソアオゲイトウ
 ホナガアオゲイトウ
 ヤナギイノコズチ

イワイタチシダ
イワシロイノデ
イワヘゴ
オオイタチシダ
オオクジャクシダ
オオベニシダ
オクマワラビ
オシダ
オニカナワラビ
キヨスミヒメワラビ
クマワラビ
サイゴクベニシダ
サカゲイノデ
サクライカグマ
ジュウモンジシダ
タニヘゴ
ツヤナシイノデ
ツルデンダ
テリハヤブソテツ
トウゴクシダ
ドウリョウイノデ
ナガバヤブソテツ
ナンゴクナライシダ
ハカタシダ
ハチジョウベニシダ
フジオシダ
フナコシイノデ
ベニシダ
ホソバナライシダ
マルバベニシダ
ミサキカグマ
ミヤマイタチシダ
ミヤマクマワラビ
ミヤマベニシダ
メヤブソテツ



写真2 メヤブソテツ

ヤマイタチシダ
ヤマヤブソテツ
リョウメンシダ
ヒメシダ科
アオハリガネワラビ
イワハリガネワラビ
ゲジゲジシダ
ハシゴシダ
ハリガネワラビ
ヒメシダ
ヒメワラビ
ホシダ
ミゾシダ
ミドリヒメワラビ
ヤワラシダ
イワデンダ科
イッポンワラビ
イヌガンソク
イヌワラビ
イワデンダ
ウスヒメワラビ
オオヒメワラビ
オオホソバシケシダ
オニヒカゲワラビ
キヨタキシダ
クサソテツ
コウヤワラビ
サトメシダ
シケシダ
シケチシダ
セイタカシケシダ
タカオシケチシダ
ヌリワラビ
ハクモウイノデ
ハコネシケチシダ
ヒロハイヌワラビ
フクロシダ
フモトシケシダ
へびノネゴザ
ホソバイヌワラビ
ホソバシケシダ
ミドリワラビ
ミヤマシケシダ
ミヤマシダ
ヤマイヌワラビ

ウラボシ科
イワオモダカ
ノキシノブ
ヒメサジラン
ヒメノキシノブ
マメヅタ
ミツデウラボシ
サンショウモ科
サンショウモ
チャセンシダ科
イワトラノオ
オクタマシダ
クモノスシダ
コタニワタリ
コバノヒノキシダ
トラノオシダ
ヌリトラノオ

<種子植物>

<裸子植物>

マツ科

アカマツ
ツガ
ヒメコマツ
モミ

スギ科

スギ

ヒノキ科

サワラ
ネズミサシ
ヒノキ

イヌガヤ科

イヌガヤ

イチイ科

カヤ

<被子植物>

<双子葉植物>

<離弁花類>

クルミ科

オニグルミ

ヤナギ科

イヌコリヤナギ
オオキツネヤナギ
オノエヤナギ

<資料紹介>

文献に見られる常陸大宮市の植物 (1)

藤田 弘道・中崎 保洋

はじめに

常陸大宮市内の植物を調査し記録していく上で、まず、これまでに記録されている植物を明らかにしていくことが必要である。そこで、筆者らはいくつかの文献を調べ、記載されている植物を目録にまとめてみた。その際、一部の種について、分類上の取り扱いの変更や明らかな同定の誤りなどの修正や削除を行っている。

なお、目録での科の配列は環境庁自然保護局(1994)に従った。種名は和名のみとし、配列は五十音順とした。

植物目録

<シダ植物>

ヒカゲノカズラ科

トウゲシバ

ヒカゲノカズラ

イワヒバ科

イワヒバ

エゾノヒメクラマゴケ

カタヒバ

クラマゴケ

ミズニラ科

ミズニラ

トクサ科

イヌスギナ

イヌドクサ

スギナ

トクサ

ハナヤスリ科

アカハナワラビ

オオハナワラビ

ナガホノナツノハナワラビ

ナツノハナワラビ

ヒロハハナヤスリ

フユノハナワラビ

ゼンマイ科

ゼンマイ

キジノオシダ科

オオキジノオ

ウラジロ科

ウラジロ

コシダ

フサシダ科

カニクサ

コケシノブ科

ウチワゴケ

コウヤコケシノブ

ハイホラゴケ

コバノイシカグマ科

イヌシダ

イワヒメワラビ

オウレンシダ

コバノイシカグマ

フモトシダ

ワラビ

ホングウシダ科

ホラシノブ

シノブ科

シノブ

ホウライシダ科

イヌイワガネソウ

イワガネゼンマイ

イワガネソウ

ウラゲイワガネ

クジャクシダ

タチシノブ

チチブイワガネ

ハコネシダ

ミズワラビ

シシラン科

シシラン

イノモトソウ科

イノモトソウ

オオバノアマクサシダ

オオバノイノモトソウ

オオバノハチジョウシダ

コユルギイノモトソウ

シシガシラ科

オサシダ

シシガシラ



写真1 シシガシラ

オシダ科

アイアスカイノデ

アイノコクマワラビ

アスカイノデ

イヌイワイタチシダ

イノデ

イノデモドキ

林 1989] を採用することとする。小林編年では、早期は撚糸文系土器の出現からとされている。

- 2 ミュージアムパーク茨城県自然博物館資料課首席学芸主事土屋勝氏、及び北海道大学名誉教授仲谷一宏氏に、校正段階になったため写真ではあるが、同定していただいた（2018.02.15）。
- 3 局部磨製石鏃の時期については、渡邊明氏は若干古く見ている。当遺跡で花輪台Ⅰ式土器など撚糸文土器に伴うスタンプ形石器が採集されていることから、その時期の可能性があると見ているのである。

引用・参考文献

* 発行者は、簡潔を期すため、書名から容易に判別する場合等は省略し、法人格を示す「財団法人」・「株式会社」等は省略した。また、シリーズ名を記すことで替えた場合がある。

- 青池紀子他 2015 『三美中道遺跡Ⅱ 滝ノ上遺跡Ⅱ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 22 集
青池紀子他 2016 『滝ノ上遺跡Ⅲ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 29 集
阿久津久 1979 「大宮町小野天神前遺跡の分析」『茨城県歴史館報』6, pp. 26-54
阿久津久 1980 「大宮町小野天神前遺跡の分析（2）」『茨城県歴史館報』7, pp. 1-20
茨城県歴史館編集・発行 1978 『茨城県大宮町小野天神前遺跡（資料編）』（学術調査報告書 1）
江坂輝弥・西田栄 1967 「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』平凡社, pp. 224-236, PL57-78
大竹憲治他 1988 『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第 19 冊
大宮町史編さん委員会編 1977 『大宮町史』大宮町
大宮町歴史民俗資料館編 1995 『大宮の考古遺物』大宮町教育委員会
小川和博・大淵淳志 2009 『西塙遺跡』日考研茨城・常陸大宮市教育委員会
瓦吹堅 1995 「縄文時代」『大宮の考古遺物』大宮町教育委員会
瓦吹堅 2014 「常陸大宮市西塙遺跡の大珠」『茨城県考古学協会誌』第 26 号, pp. 131-140
栗島義明 2007 「硬玉製大珠の社会的意義」『縄文時代の社会考古学』同成社, pp. 83-106
後藤俊一 2013 『鷹巣戸内遺跡』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 12 集
小林達雄編 1989 『縄文土器大観』1, 小学館
芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』第 2 集, 東北大学日本文化研究所, pp. 1-68
高野浩之他 2013 『赤岩遺跡Ⅱ 三美中道遺跡Ⅰ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 15 集
辻弘和・原川雄二 2009 『西塙遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会
那珂町史編さん委員会編 1990 『那珂町の考古学』那珂町
中村信博 2002 「第 4 章 考察—第 1 群 1 類土器（擦痕土器）の編年的位置について—」『天矢場』茂木町埋蔵文化財調査報告書第 2 集
中村信博 2017 「堀込型石鏃の研究」『利根川』39, 利根川同人, pp. 1-8
平石尚和 2017 『中崎遺跡Ⅰ』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 31 集
三輪孝幸・後藤俊一 2014 『山根遺跡』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 20 集
矢野茂 2007 「214. 茨城県常陸大宮市西塙遺跡の硬玉製大珠」『Aesculus』No. 24, アエスクルス同人, p. 8
渡辺誠 1980 「岩版」『薄磯貝塚』福島県立磐城高等学校史学部後援会, pp. 74-76, 第 33 図, 図版第 14

（考古部会専門調査員・常陸大宮市教育委員会囑託職員）

的な石材である。そのヒスイを利用した大珠は、拠点集落である環状集落から基本的に各1個しか出土しないことから、集団内の特別な存在である人が威信財として身に着けていたと考えられている〔栗島2007〕。

当遺跡の渡邊資料には、ほかにも縄文時代中期の土器片や石器類が含まれている。ヒスイ製品を含むこれら資料の分析を通じて、縄文時代中期を中心とした集落の様相がより明らかになる。

結び

以上、渡邊資料のごく一部を紹介した。

渡邊資料は各時代の資料を含むが、特に縄文時代草創期から早期にかけての資料が注目される。これまでは長い間、小野天神前遺跡の早期・沈線文土器がこの

地域最古の土器とされてきた〔大宮町史編さん委1977, 瓦吹1995〕。土器だけでなく、それ以前の縄文時代の遺構・遺物は知られていなかった。最近になって草創期・早期の資料が確認され始めている〔青池他2015・2016, 平石2017〕が、資料的にはまだまだ貧弱である。今回、草創期に属する中崎遺跡の有舌尖頭器、早期に属する下小場遺跡の縄文・撚糸文・擦痕・沈線文等の土器群、上ノ内遺跡の局部磨製石鏃、下小場遺跡・古宿遺跡・上ノ内遺跡の打製片刃石斧などを紹介した。当該時期に関する資料が一挙に充実したことになる。

そのほか、後期旧石器時代に属する三美中道遺跡のナイフ形石器や尖頭器、縄文時代中期に属すると思われる山根遺跡の蛇体把手、西埜遺跡のヒスイ製大珠、後・晩期に属すると思われる小野天神前遺跡の土偶や垂飾・スタンプ形土製品・石剣・独鈷石・線刻礫・岩版等を紹介した。

今回はごく一部を紹介しただけであるが、いずれもきわめて貴重な資料で、それだけでも渡邊資料が地域の歴史を塗り替えるほどの内容、あるいは当時の文化理解を一層深める内容を持っていることが窺えると思う。今後、今回紹介できなかった資料を紹介するとともに、検討を加えることによって、この地域の歴史・文化がより鮮明になっていくものと考えている。今後は報告書刊行に向け、膨大な量の資料を整理していかなくてはならない。そしてより深い資料理解のため努力を重ねなければならないと思っている。種々御教示を賜りたいと願うものである。

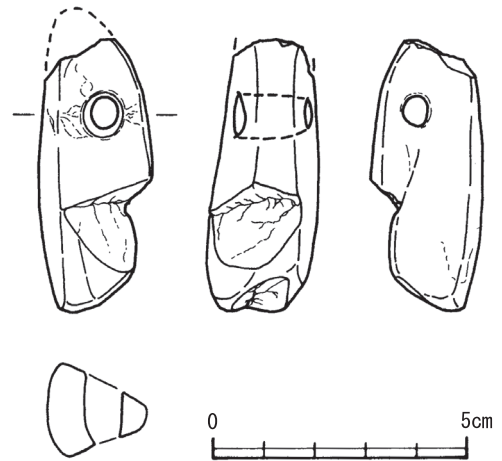
謝辞

本稿を草するにあたり、渡邊明氏はもとより、多くの方々及び機関にお世話になった。特に、市史編さん専門調査員橋本勝雄氏には、一部の石器について実測・トレースをしていただき、多くの御教示も賜った。また、サメの歯に関しては、土屋勝氏、仲谷一宏氏に御教示いただいた。そのほか、以下の方々及び機関には御教示を賜り、あるいは情報収集等でお世話になった。文末ではあるが、記して感謝の意を表したい(順不同、敬称略)。

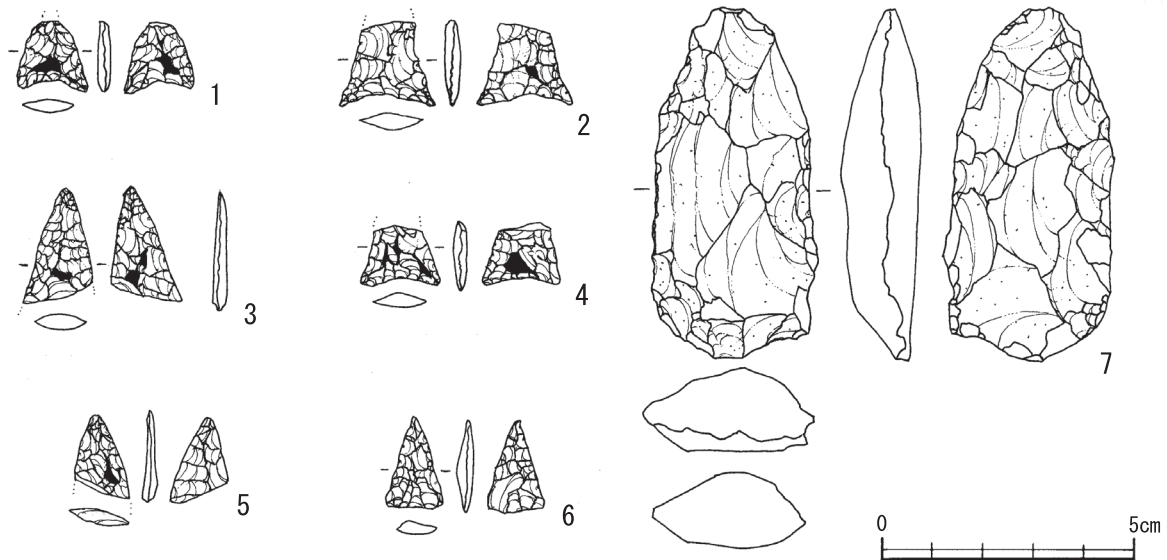
相田尚人、荒井保雄、石橋美和子、稲田健一、江原美奈子、大竹憲治、小野千里、河西恵子、瓦吹堅、鈴木素行、須藤公子、中村信博、西川博孝、皆川修、茨城県埋蔵文化財センター(いせきびあ茨城)、茨城県立歴史館、公益財団法人茨城県教育財団、公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、茂木町ふみの森もてぎ

註

1 縄文時代草創期・早期の土器編年体系については、本稿では、現在もっとも一般的である小林編年〔小



第9図 西埜遺跡採集遺物実測図

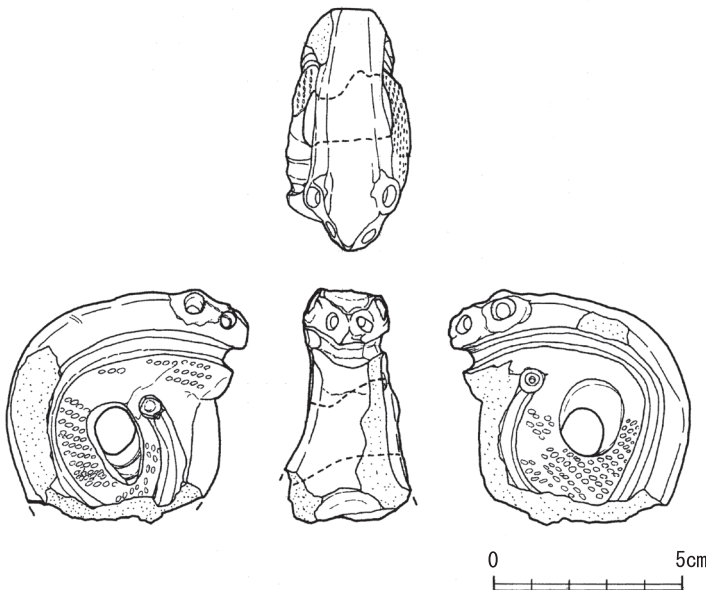


第7図 上ノ内遺跡採集遺物実測図

北関東東部地域を主要な分布圏としている〔中村 2017〕。当遺跡はそうした分布圏の中心部の一面を占める。

(10) 山根遺跡（第8図，巻頭写真3-3）

那珂川との合流地点に近い緒川の右岸河岸段丘上に立地する，縄文時代から平安時代の集落遺跡である。一部が調査され，弥生時代後期と平安時代の住居跡等が確認されている〔三輪他 2014〕。



第8図 山根遺跡採集遺物実測図

寄贈資料は1点で，縄文土器の装飾把手である。その形状からは蛇を象った蛇体把手と考えられる。円環状の蛇体の上に，横に突き出す頭部を表現し，2対の穴で鼻孔と目を表現している。頭部は三角形で，マムシを表している可能性がある。蛇体把手は縄文時代中期に特徴的な装飾であり，その時期の遺構の存在を推測させる。当時の文化や縄文人の意識を探るうえでよい資料となろう。

(11) 西埜遺跡（第9図，巻頭写真3-2）

那珂川左岸の河岸段丘上に立地する，縄文時代中～晩期と奈良・平安時代の複合遺跡である。一部が調査され，縄文時代中期の拠点集落の一部が明らかになっている〔辻他 2009，小川他 2009〕。

第9図はヒスイ（硬玉）製大珠である。形状はいわゆる「鯉節形」に近い。頭部に新しい欠損があり，現状での計測値は長さ5.5 cmであるが，約6 cmに推定復元できよう。頭部側1/3ほどの部分に，先端の丸い棒状工具により片側から穿孔された貫通孔がある。胴部に見え隠れする部分があるが，角が摩耗しており素材段階以前の割れであろう。当遺跡ではすでに2点のヒスイ製大珠が採集されており〔矢野 2007，瓦吹 2014〕，本例が3例目になる。縄文時代中期の所産と考えられる。ヒスイは，日本では新潟県の糸魚川周辺でのみ産出する貴石で，縄文時代における広域流通の対象として代表

1～28は縄文土器である。1は不鮮明だが縄文を施文する早期前葉・夏島式土器，2・3は撚糸文を粗く施文する早期前葉・稻荷台式土器，4～11は擦痕が著しい無文土器，いわゆる擦痕土器で，撚糸文系に後続する早期前葉・花輪台Ⅱ式土器〔那珂町史編さん委1990〕，または天矢場式土器〔中村2002〕，12～19は沈線文を施文する早期中葉・三戸式土器，20は沈線文と連続刺突を施文する早期中葉・田戸下層式土器である。21～24は沈線文を施文する三戸式または田戸下層式土器であろう。25は尖底土器の尖底に近い破片で，三戸式または田戸下層式のものと思われる。26は胎土に繊維を含み内外面に条痕文を施す早期後葉のものであろう。27は貝殻による連続刺突文を施文する前期中葉・浮島式土器，28は貝殻圧痕文を施文する興津式土器である。29(写真3-8)は打製片刃石斧である。両面加工で，裏面の上下両端に平滑な自然面を残す。石材はホルンフェルス，長さは16.9cmである。形状から，縄文時代早期後半から前期前半の所産と考えられる。

今回，縄文時代早期，中でも早期前葉の土器群が明らかになったことは，当地域史の理解にとってきわめて意義深い。打製片刃石斧もこれまで当市域では知られていなかったものである。

(6) 弁慶松塚群

久慈川右岸河岸段丘のやや内部に位置し，近世の塚2基が確認されている。発掘調査はされていない。採集資料は内耳土器片9点である。

(7) 古宿遺跡 (第6図)

那珂川左岸河岸段丘上に立地する，縄文・古墳・奈良・平安時代の集落遺跡である。調査歴はない。

採集されている資料は1点で，打製片刃石斧である。石材はホルンフェルスで，ほぼ完存し，長さは11.0cmである。基部は尖頭状をなす。形状から縄文時代早期の所産と考えられる。

(8) 野上槻遺跡

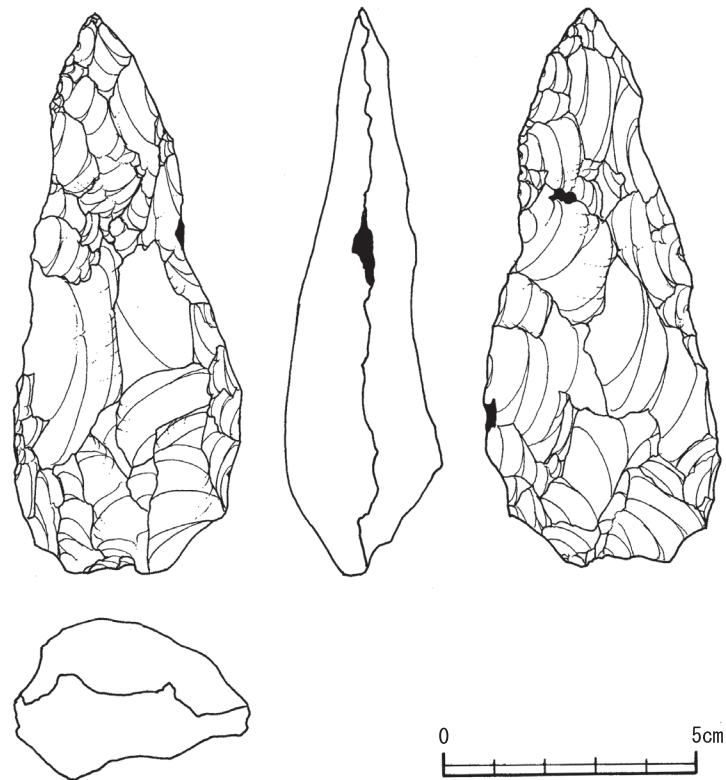
久慈川右岸河岸段丘上に立地する，旧石器時代，縄文時代と平安時代の複合遺跡である。当遺跡は，かつて渡邊氏が表採資料を当市教育委員会に届けたことから周知に至った経緯がある。調査歴はない。

採集資料は，旧石器時代の石核・剥片と平安時代の土師器・須恵器が主なものである。

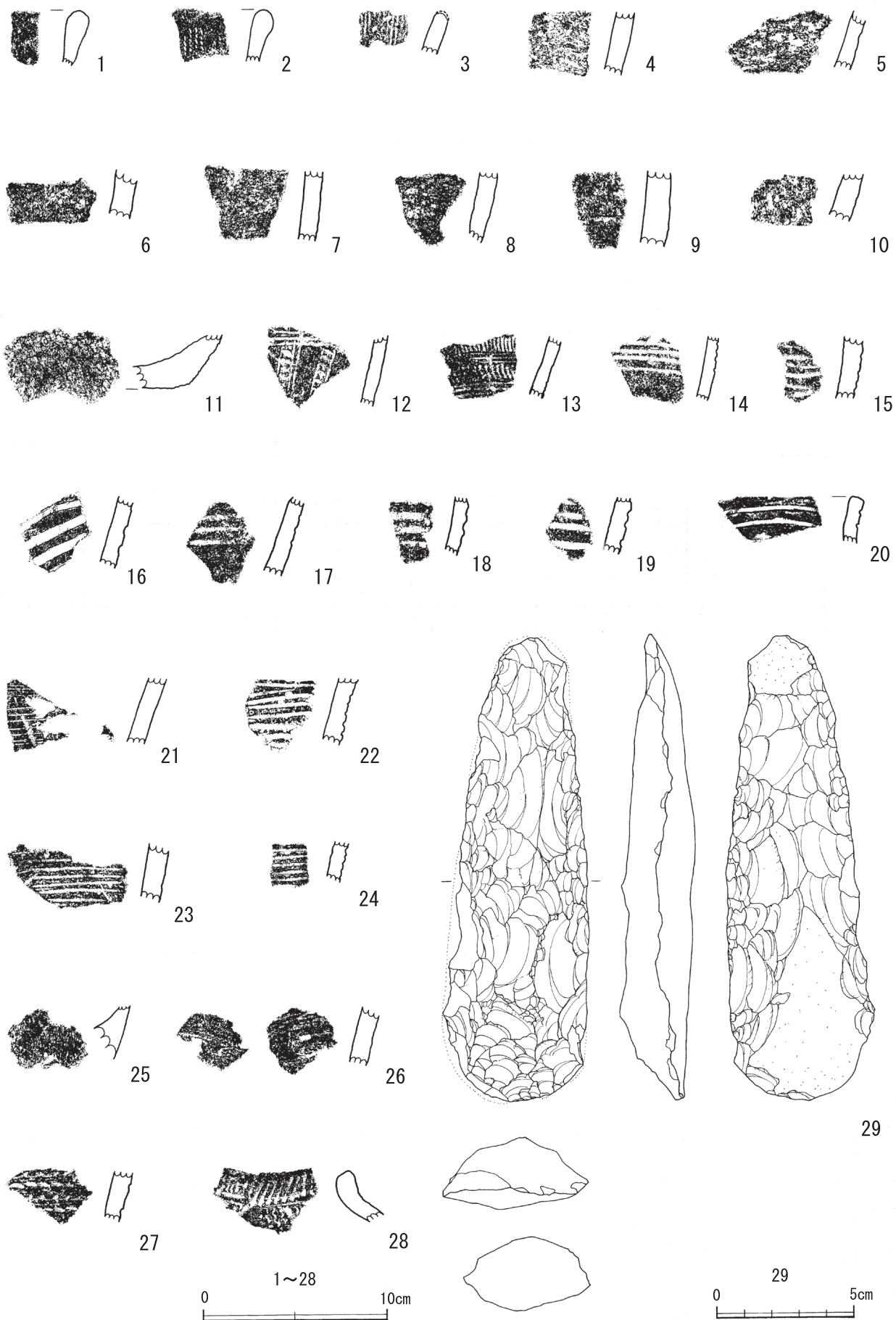
(9) 上ノ内遺跡 (第7図)

栃木県境に近い，那珂川左岸の低位段丘上に立地する，縄文時代と奈良・平安時代の遺跡である。調査歴はない。

採集資料には擦痕土器・石鏃・打製石斧・スタンプ形石器が含まれる。1～5は局部磨製石鏃，6は平基の石鏃，7はいわゆるトロトロ石製の打製片刃石斧で，いずれも縄文時代早期前半・花輪台Ⅱ式土器〔那珂町史編さん委1990〕，または天矢場式土器〔中村2002〕に伴うものと考えられる。局部磨製石鏃は，天矢場式土器に伴う堀込型石鏃に特徴的なもので(註3)，栃木県から茨城県にかけての



第6図 古宿遺跡採集遺物実測図



第5図 下小場遺跡採集遺物実測図

4は勾玉形の石製垂飾である。小型扁平な自然礫を利用し、若干磨って整形している。長さは2.5 cmである。頭部に両面穿孔により小孔を開け、脚部には磨りにより細かなキザミを入れる。

5はサメの歯の化石製の垂飾である。現状では縦に割れて半分を欠失している。長さは2.3 cmである。歯の形状をおおよそ残して全面を研磨調整し、歯根に近い部分に両面穿孔により1孔を開け、側縁上部には磨りにより小さな抉りを入れる。側縁は水磨または研磨により滑らかな線を示すが、エナメル質部分の中に象牙質が点々と露出する。鋸歯縁の痕跡である。サメの種類はホホジロザメで、利用されているのは上顎歯の1本である(註2)。

6は独鈷石である。石材は閃緑岩である。全体は扁平で、両端は石斧状を呈する。中央部付近の1対の隆起は滑らかな面で形成される。晩期の所産であろう。

7(写真3-6)は石剣の先端部付近の破片である。粘板岩製で、先端部にはわずかな段を有する。非常に精巧に作られ、それぞれの段及び段の頭部側には渦巻き文とI字状文を線刻する。線刻部分には赤色顔料が濃密に残存する(図中、赤アミ部分)。

8は線刻礫で、その表現からは岩偶と呼んでもよい。灰白色の凝灰質泥岩の扁平な楕円礫を利用しており、長さは13.8 cmある。正面に横1条とそこから垂下する6条の細く浅い線を刻む。線刻表現の類例としては愛媛県上黒岩岩陰遺跡[江坂他1967]のものがあり、髪・乳房・腰蓑の線刻により女性を表現しているとされ、「ヴィーナス像」と呼ばれることもある。本例の線刻は、その腰蓑の表現に共通する。上黒岩例は、時期的には縄文時代草創期の所産とされる。周辺地域では福島県いわき市薄磯貝塚[渡辺1980, 大竹他1988]の多数の線刻礫がある。腰蓑を表現する例はないが、石材は共通する。時期的には晩期のものである。本例の年代については、薄磯貝塚例との石材の共通性や当遺跡の他の遺物の年代等から、晩期の所産と考えておきたい。

9(写真3-7)は岩版である。凝灰質泥岩を長方形の板状に整形しており、長さは8.7 cm、幅は6.0 cmある。正面一杯に、複合した線でS字状の文様を線刻する。

当遺跡採集資料は、前述したように膨大で、縄文時代晩期を中心にした多様な遺物を含む。今回紹介したものはごく一部に過ぎないが、当時の精神性豊かな文化を髣髴させる貴重なものである。

(3) 鷹巣戸内遺跡

久慈川右岸の低位段丘に立地する。一部が発掘調査され、平安時代から中世の集落跡が確認されている[後藤2013]。採集資料は1点で、灰釉陶器碗の高台の付いた底部片である。発掘調査でも灰釉陶器が出土している。

(4) 中崎遺跡(第4図)

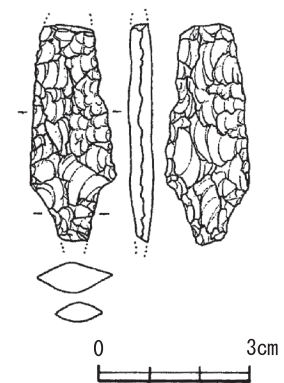
那珂川左岸の河岸段丘上に立地する。一部が調査され、縄文時代草創期の陥し穴、早期(三戸式)・前期(黒浜式)・後期(称名寺式)の竪穴住居跡が確認されている[平石2017]。

図示したのはチャート製の有舌尖頭器である。長さは、両端が折損しているが、現状で4.4 cmで、復元すると7 cm前後になろう。長身のいわゆる「小瀬ヶ沢型」[芹沢1966]に分類されるものである。有舌尖頭器は縄文時代草創期に特徴的な石器とされているが、本例は市内唯一の例になる。

(5) 下小場遺跡(第5図, 巻頭写真3-8)

那珂川左岸の河岸段丘上に立地する、縄文・古墳・奈良・平安時代及び中世の集落遺跡である。これまで発掘調査等はされていない。

寄贈資料には、縄文時代早期及び前期の土器群と石器群、平安時代の土師器・須恵器、中世の青磁・青白磁・古瀬戸などが含まれる。



第4図
中崎遺跡採集遺物実測図



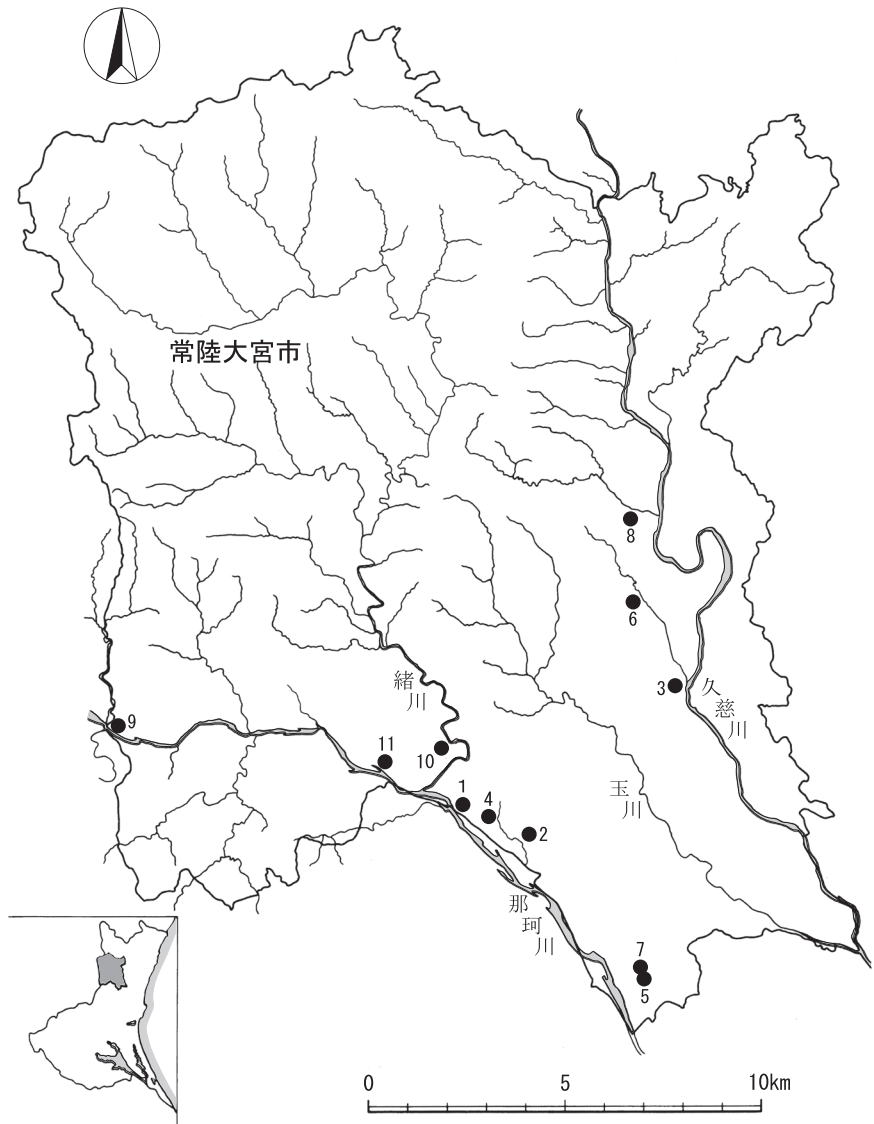
第3図 小野天神前遺跡採集遺物実測図

(2) 小野天神前遺跡 (第3図, 巻頭写真3-1, 4~7)

那珂川左岸の河岸段丘上に立地する。1976 (昭和51) 年に一部の発掘調査が行なわれ, 弥生時代中期の再葬墓遺跡として著名な遺跡となっている [茨城県歴史館 1978, 阿久津 1979・1980]。しかし, 縄文時代後・晩期の大遺跡でもあり, そのほかにも旧石器時代・平安時代などの遺跡が複合する。

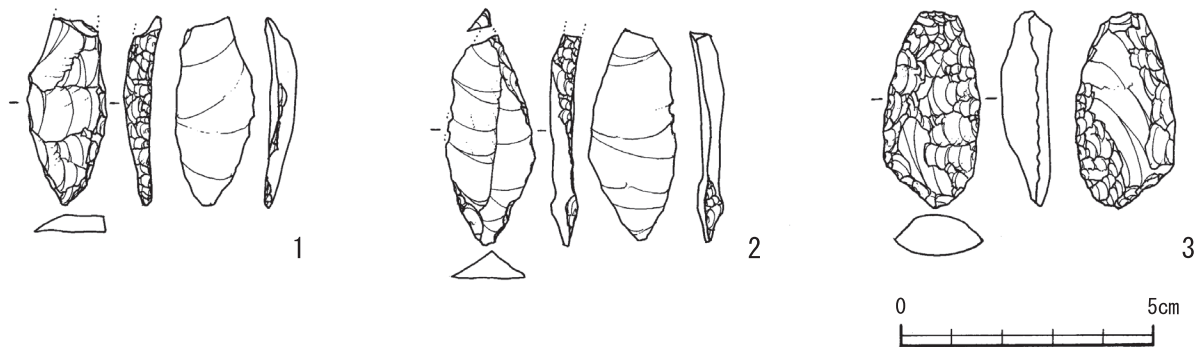
1 (写真3-5)はハート形土偶の頭部である。顔面上半部から頭部にかけて残存し, ハート形の顔面, 大きな鼻, 環状の粘土紐を貼った目などがハート形土偶の特徴を示している。ハート形土偶は縄文時代後期初頭に特徴的な土偶で, 北関東地方を中心として分布する。

2 (写真3-4)は, 左右両脇を欠損しているが, 山形



第1図 採集遺跡位置図

* 図中の番号は表の番号と対応する。



第2図 三美中道遺跡採集遺物実測図

土偶の頭部である。粘土板に粘土紐を貼り付けて顎を表し, 眉と鼻はT字状の隆帯によって, 目と口は棒状工具による刺突で表現する。耳は小孔を開ける。山形土偶は, 縄文時代後期中葉の関東地方, 特に霞ヶ浦から利根川水系に特徴的な土偶である。

3 (写真3-1)はスタンプ形土製品である。長さ4.7cmの楕円形の「スタンプ」部に小孔を開けた撮み部が付く。「スタンプ」面の文様は, 短軸方向と長軸方向 (正中線) の刻線で構成されている。

表 採集遺跡と主な遺物（2017. 3. 15～2017. 12. 26 寄贈分）

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	点数	主な時代と遺物
1	大 009	三美中道遺跡	三美字中道 755 外	20	旧石器時代/ナイフ形石器・尖頭器
2	大 013	小野天神前遺跡	小野字天神前 2848-1 外	5,727 (5,174)	縄文時代後・晩期/石鏃・磨石・石錘・土偶・線刻礫・岩版・石剣・装身具・骨角器等, 平安時代/土師器, 中世/陶磁器
3	大 034	鷹巣戸内遺跡	鷹巣字埜 910 外	1	平安時代/灰釉陶器
4	大 087	中崎遺跡	三美字小林 1024 外	460	縄文時代草創期/有舌尖頭器, 早期/土器
5	大 089	下小場遺跡	小場字下小場 6634 外	255	縄文時代早・前期/土器・打製片刃石斧
6	大 093	弁慶松塚群	小祝字弁慶松 561-1 外	9	近世/内耳土器
7	大 113	古宿遺跡	小場字古宿 295 外	1	縄文時代早期/打製片刃石斧
8	山 026	野上槻遺跡	野上字槻 2860 外	99	旧石器時代/剥片, 平安時代/土師器
9	御 020	うえのうち 上ノ内遺跡	野田 1565 外	138	旧石器時代/剥片, 縄文時代早期/土器・石器, 平安時代/土師器
10	御 069	山根遺跡	野口平 554-1 外	1	縄文時代中期/土器・蛇体把手
11	御 081	西埜遺跡	野口 1900-1 外	189 (181)	縄文時代/ヒスイ製大珠
計		11 遺跡		6,900 (6,339)	

*遺跡番号は旧町村のものを引き継いでおり、同一番号を区別するために旧町村名の頭文字を冠している。「大」「山」「御」はそれぞれ大宮町、山方町、御前山村であることを示す。本表は、旧町村ごと、遺跡番号順に配列した。

*点数欄の（ ）内は骨角片を除いた点数である。

骨角器を含む骨角細片が多いのでそれらを除いても合計 6,339 点中 5,174 点で、81.6%とやはり多数を占めている。小野天神前遺跡の中では石鏃・同未成品が多く、1,938 点（33.8%）あった。渡邊氏によれば、同遺跡には少なくとも 200 回以上は表採に行ったとのことである。散布する遺物がきわめて多く、また多種多様であり、おそらくそうしたこともあって表採回数も多くなったものと思われる。いずれにせよ、小野天神前遺跡が数量と多様性で他を圧倒している。

時代別では、旧石器時代から近世までと幅広いが、やはり多いのは縄文時代である。これは、上述した小野天神前遺跡の遺物が多量であることと連動する。一方で、遺跡での絶対量が少ないと思われる旧石器や縄文時代草創期・早期^(註1)の遺物が一定程度含まれている。こうした事実には渡邊氏の関心の所在が関係しているのは間違いない。

2 資料紹介

以下、表の順にしたがい、遺跡ごとに、遺跡の簡単な紹介をした上で主な遺物を紹介する。ただし、紙幅の関係ですべての遺跡での図の掲載はできなかった。諒とされたい。

(1) 三美中道遺跡（第2図）

那珂川左岸の河岸段丘上に立地する。一部が発掘調査され、縄文時代中期の集落跡のほか、旧石器時代石器集中地点や奈良・平安時代と中近世の集落も確認されている〔高野他 2013, 青池他 2015〕。

1・2 はナイフ形石器、3 は尖頭器である。石材はいずれもメノウで、長さは最も長い 2 が現状で 4.1 cm である。ナイフ形石器は後期旧石器時代・砂川期の所産で、尖頭器も同時期と見てよい。

<資料紹介>

渡邊明氏採集の常陸大宮市内考古資料（予報）

萩野谷 悟

はじめに

渡邊明氏（那珂市在住，1949年（昭和24）4月12日生まれ）は，茨城県内を中心とした遺跡の出土遺物の表面採集（以下，「表採」）活動で知られた考古学研究者である。半世紀を超える活動の結果，膨大な量の資料を所持しておられ，その中にはきわめて貴重な資料を含んでいる。渡邊氏の活動範囲は広く，常陸大宮市はおろか茨城県内にも収まらず，千葉県や栃木県等にも及んでいる。それは勤務先が日本専売公社（のち，日本たばこ産業株式会社）で，煙草の買い付け等でそれらの地域の農村を訪問することが多かったこととも関係する。主な表採の対象は旧石器時代から縄文時代の遺物であるが，各地域の考古遺物をひとつお理解するため，また遺物の散逸を防ぐため，目に触れた遺物は他の時代の遺物もすべて採集されている。渡邊氏は自らの活動を「畑乞食」と卑下するが，資料の散逸を防いだ点でも高く評価されるべきである。現在は，今後の資料活用を考慮し，地元自治体への返還の努力をされている。

渡邊氏は常陸大宮市内採集遺物をこれまでも当市の歴史民俗資料館や教育委員会に寄贈されてきたが，そこでは十分な対応ができていなかった。常陸大宮市では2016年（平成28）度から市史編さん事業を開始することになり，これを機にこうした資料の受け入れ態勢を整えるとともに，受け入れた資料の整理・調査・研究及び公開をすることとした。渡邊氏の資料もこうした態勢の中で受け入れることになった。返還・寄贈された渡邊氏には衷心から深い感謝の意を表す。

渡邊氏から寄贈された常陸大宮市内関係資料（以下，「渡邊資料」）については，現在，筆者も加わって，市史編さんの一環として整理作業を進めているところである。作業は2016年度末から開始したが，いまだ全容が把握できていない。確実に把握できているのは，資料の受け入れ態勢を整えたのちの寄贈分で，2017年（平成29）3月15日から現在（2017年末）までの，寄贈の回数にして36回分である。それ以前の分については，現段階においては充分把握できていない。

本稿では渡邊資料の一部を紹介する。ただ，以上のような状況の中での紹介となるので，確実に把握できている上記期間受け入れ分を対象としたい。それ以前の受け入れ分を含む渡邊資料の整理作業の成果は後日資料調査報告書として刊行する予定であるが，当該地域の歴史を知る上できわめて重要な資料を多数含むことから，報告書に先行して一部を紹介することとした次第である。

なお，本稿は予報であり，報告書刊行後はそれが正式報告となるのでそちらに拠られたい。また，本稿は紙幅の制約もあって説明等が不十分な部分も多いが，報告書では過不足なく説明等をする所存なので，その意味でも報告書刊行後はそちらに拠られたい。

1 渡邊資料について

本稿が対象とする渡邊資料について，表に採集遺跡と遺物の点数及び主な遺物，第1図に採集遺跡の位置を示した。総量は，久慈川・那珂川の河原などから採集した石材標本を除き，11遺跡の表採資料6,900点である。遺物用のコンテナ6箱分になる。

旧町村別では，大宮町7遺跡，御前山村3遺跡，山方町1遺跡で，緒川村・美和村は含まれない。市域の南半部に集中する。南部は河岸段丘が多く，遺跡立地の好条件を備えていたことに加え，煙草栽培に適した畑地が多く，渡邊氏の訪問機会が多かったであろうこととの関連が窺われる。

遺跡別の遺物点数では，小野天神前遺跡が5,727点で，83.0%と圧倒的多数を占める。同遺跡は